下馬周辺遺跡(№200)

大町二丁目 1001 番 4 地点

例　　言

1．本報は「下馬周辺遺跡（鎌倉市№200)」内、大町二丁目 1001 番 4 地点における個人住宅建設にともなう埋蔵文化財発掘調査報告である。
2．調査期間　2005 年 2 月 3 日～同年 2 月 28 日
　調査面積　46.50 ㎡
3．本調査地点の略称は GO215 とした。
4．調査体制
　担　当　者　馬淵和雄
　調　査　員　鍛治屋勝二・松原康子・根本志保（資料整理）
　調査補助員　鈴木弘太・吉田智哉・北泉剛史・岩崎卓治（資料整理）
　作　業　員　鯉沼稔・沼上三代治・宝珠山秀雄・渡辺輝彦
5．本報作成分担
　遺構図整理　根本
　遺物実測　　松原・根本・岩崎
　同墨入れ　　松原・根本・岩崎
　同観察表　　松原
　同写真撮影　根本
　原稿執筆　　馬淵・松原・根本（担当部分末尾に執筆者名を記した）
　編集・総括　馬淵

目　　次

第一章　遺跡と調査地点の概観 ---------- 194
　1．位置と立地 ---------- 194
　2．歴史的環境 ---------- 194
第二章　調査の概略 ---------- 201
　1．調査にいたる経緯 ---------- 201
　2．調査方法 ---------- 201
　3．調査の経過 ---------- 201
第三章　調査結果 ---------- 202
　第 1 節　層序と面の概要 ---------- 202
　第 2 節　各説 ---------- 204
　1．上層遺構群 ---------- 204
　2．下層遺構群 ---------- 207
　3．採集遺物 ---------- 211
　4．鋳造関係の遺物 ---------- 211
第四章　まとめと考察 ---------- 217
　1．遺構の変遷について ---------- 217
　2．出土遺物の傾向について ---------- 217
　3．県道鎌倉葉山線について ---------- 218

挿　図　目　次

図１　調査地点と周辺の遺跡・旧跡 ---------- 195
図２　調査区位置図 ---------- 197
図３　調査区設定図 ---------- 202
図４　上層遺構群全図・調査区壁土層断面図，
同出土遺物 ---------- 203
図５　溝１・２上層出土遺物 ---------- 205
図６　溝２下層・最下層・確認坑出土遺物 ------ 206
図７　下層遺構全図、竪穴１・土坑１・出土遺 -- 208
図８　上層遺構群包含層・上層遺構面出土遺物，
Ⅰ面出土遺物 ---------- 209
図９　最終深掘り出土遺物，世以前の遺物，遺
構外採集遺物 ---------- 210

表　目　次

表１　遺物観察表（1） ---------- 212
表２　遺物観察表（2） ---------- 213
表３　遺物観察表（3） ---------- 214
表４　遺物観察表（4） ---------- 215
表５　遺物観察表（5） ---------- 216

図　版　目　次

図版１－１　調査地点付近鳥瞰 ---------- 220
１－２　調査地点近景（東を望む）
１－３　調査地点近景（東から）
図版２－１　全景(南から) ---------- 221
２－２　全景(西から)
図版３－１　溝１北半分(南から) ---------- 222
３－２　溝１北半分(北から)
３－３　溝１南半分(南から)
３－４　青磁碗出土状況（溝２内）
図版４－１　溝２底部材(西から) ---------- 223
４－２　溝２底部材接続部 拡大(西から)
４－３　溝２底部材(南から)
４－４　溝２内南側ベルト土層断面(南から)-224
図版５－１　竪穴１（南から）
５－２　土坑１（南から）
５－３　土坑１土層断面（南から)
５－４　土坑１（西から）
５－５　土坑１・P.13（西から）
図版６－１　東壁北半分深掘り土層断面(北から)-225
６－２　南壁溝２部分土層断面
６－３　南壁道路部分土層断面
図版７　出土遺物１ ---------- 226
図版８　出土遺物２ ---------- 227

第一章　調査地点概観

１．位置と立地

大町は鎌倉東南部名越山麓に位置し、逆川の開析した広い谷（「名越大谷」）と、谷を出て西流する川が形成した山麓平野を占める。中央部に鎌倉南部を横断する街道（現県道鎌倉葉山線）が通じる東西に長い町で、その四至は明治時代初期の『相模国鎌倉郡村誌』(『皇国地誌』) によれば、東は名越山塊で三浦郡久野谷村（逗子市久木）と境を接し、西で長谷村（現由比ヶ浜)、北は浄明寺村、雪ノ下村、小町村、扇ヶ谷村、南で乱橋材木座村に接する。昭和の地名変更まで西は佐助ケ谷におよんだ。

近世の地誌『新編相模国風土記稿』には、大町は夷堂橋以南とある。町小路・米町・辻町・魚町・名越町・長谷小路・元田代・峰岸・岩崎・かけ澤・中座町・松殿町・傘町などがあった。明治初期の『相模国鎌倉郡大町村誌』(『皇国地誌』) では、米町・辻町・傘町・魚町・松殿町・町小路・中座町・反目久保・高番屋・塔の辻・佐々目カ谷・七観音・佐介ガ谷（の半分、もう半分は扇ガ谷村に属す)・天狗堂・千葉地・裁許橋・蔵屋舗・松葉・名越等の地を合わせて一村となし大町村と名づけたという。若宮大路西側の相当広い範囲まで大町であったことがわかる。なお後者には、往時は本郷と称したこともあったとあるが、真偽はわからない。

調査地点は、鎌倉市大町二丁目 1001 番 4 に所在する。鎌倉市西南部の長谷から若宮大路下馬四ツ角を経て逗子市に抜ける県道鎌倉葉山線の南に接し、ＪＲ横須賀線に近接し線路を挟んで西側には延命寺がある。滑川の左岸と逆川の右岸に挟まれた標高 6.4～6.5ｍほどの微高地上にあり、ほんの 150m たらず西の下馬四ツ角付近の若宮大路が 3.8ｍ前後なので、大路から東に向かうと、本地点に向けてぐんと高まる印象がある。上本進二によれば一帯は砂泥質平野である（2000 上本)。

この一帯を描いたことで知られる明応六年（1497）頃成立の「善宝寺寺地図」(津久井光明寺蔵）によれば、調査地点が中世に「米町」と呼ばれていた地域に含まれていることは間違いない。善宝寺は現在の教恩寺西側の場所にあったから、本地点はまさしくその門前に当たる。しかし、「米町」が「大町」の一部なのか、それとも大町とは別にこの名称があるのかは不明である。

中世の「大町」の範囲について、明瞭にはわかっていない。「大町」とはおそらく小町に対する呼称であり、鎌倉時代に幕府より七ヶ所の商業地域の一つに指定されて以来、終始鎌倉の商業活動の中心となった。『吾妻鏡』承久二年（1220）二月十六日条に「大町以南焼亡」とみえ、同月二十六日条には「大町上失火」とある。近世の地誌『新編鎌倉志』は、「大町は夷堂橋と逆川橋との間の町なり」という。「以南」といい、「上」といい、これらの語感からは「大町」が東西に長い地域であることがうかがえる。寛喜三年（1231）一月十六日条には「及横町南北六町余災、出羽前司（中条家長）宅在此内」とみえ、人家のたて込んでいる一方で有力御家人の屋敷もあったことがわかる。

津久井郡光明寺には「善宝寺寺地図」とともに、明応六年（1497）七月二十五日付「善法（宝）寺分年貢注文」が存在する。そこには寺領内の作人十数人の年貢額が記されている。作人名の肩には米町をはじめ中座・塗子または辻子といった地名、日常物屋・紙屋・銀細工・塗しなどの職業が書かれている（『神奈川県史　資料編』３－6410)。

２．歴史的環境

縄文時代

鎌倉旧市街地内での縄文時代の遺跡の発掘調査は行われていないが、遺物は北側山裾近くを中心にと

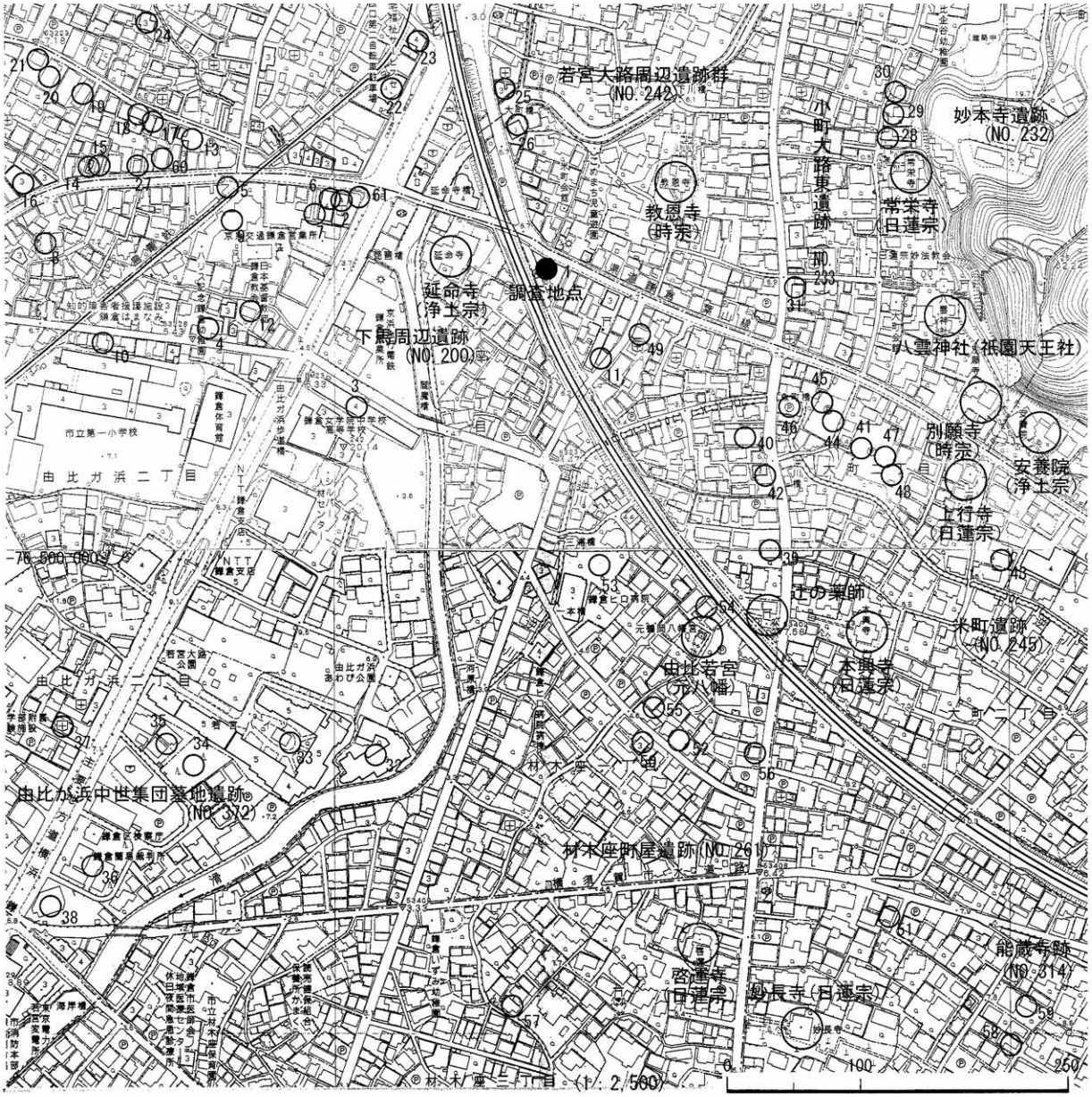


図１　調査地点と近辺の遺跡・旧跡

図１調査地点名（『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』は『市緊急調査報告書』と略し、個別地点名は省略）

下馬周辺遺跡（№200）　1．大町２－1001－4（2005 馬淵和雄）本調査地点　2．由比ガ浜２－２－２（1988 福田誠）未報告　3．由比ガ浜２－1011－1（1989 大河内勉）　大河内 1998『下馬周辺遺跡発掘調査報告書―鎌倉女学院地点―』下馬周辺遺跡発掘調査団　4．由比ガ浜２－27－9（1988 田代郁夫）未報告　5．由比ガ浜２－18－12（1990 宗臺秀明）宗臺ほか 1992『下馬周辺遺跡東京電力鎌倉営業所改築に係る発掘調査報告書』下馬周辺遺跡発掘調査団　6．由比ガ浜 ２－２－10（1990 福田誠）未報告　7．由比ガ浜２－２－12（1998 斎木秀雄）熊谷満 1998『下馬周辺遺跡-由比ヶ浜二丁目２番 12 地点-』下馬周辺遺跡発掘調査団　8．由比ガ浜２－110－5（1998 菊川英政）菊川 2001『市緊急調査報告書』17　9．由比ガ浜２－18－1（2001 汐見一夫）　未報告　10．由比ガ浜２－39－14（2004 原廣志）原 2010『市緊急調査報告書』26　11．大町２－975－6（2003 森孝子）森 2006『市緊急調査報告書』22　12．由比ガ浜２－18－1（2001 汐見）未報告

若宮大路周辺遺跡群（№242）　13．由比ガ浜１－117－１（1988 斉木）斎木 1991『由比ガ浜１－117－１地点遺跡』　14．由比ガ浜１－120－6（1991・1992 田代）未報告　15．由比ヶ浜１－120－2・14 地点（2008 斎木）未報告　16．由比ガ浜１－128－7（1986 馬淵）馬淵 1988『市緊急調査報告書』5　17．由比ガ浜１－118－7（1995 田代郁夫）遠藤雅一 1998『市緊急調査報告書』13　18．由比ガ浜１－118（1987・1988 馬淵）馬淵 1995「若宮大路周辺遺跡群―由比ガ浜一丁目 118 番地点―の発掘調査について」（地点 19 報告付載資料）『市緊急調査報告書』11　19．由比ガ浜１－123－5（1994 馬淵）馬淵 1995『市緊急調査報告書』11　20．由比ガ浜１－126－3　21．由比ガ浜１－126－１　22．御成町 884－6（1997 宮田真）宮田ほか 1990『若宮大路周辺遺跡群発掘調査報告書』若宮大路周辺遺跡群発掘調査団　23．御成町 872－14（1991 木村美代治）木村ほか『市緊急調査報告書』8　24．御成町 727（1990 木村）未報告　25．小町１－1028－1（1990 大河内勉）大河内 1997『若宮大路周辺遺跡群発掘調査報告書小町一丁目 1028 番１地点』若宮大路周辺遺跡群発掘調査団　26．大町１－1032－1　27．由比ガ浜１－118－11　60．由比ガ浜１－118－10　61．由比ガ浜２－２－２

妙本寺遺跡（№232）　28．大町１－1158－1（1987 福田）福田 1988『市緊急調査報告書』4　29．大町１－1158－5（1990 宗臺）宗臺 1991『市緊急調査報告書』7　30．大町１－1146（継 1992）継実ほか 1994『市緊急調査報告書』10

小町大路東遺跡（№233）　31．大町 1-1181（原 1980）　未報告
由比ヶ浜中世集団墓地遺跡（№372）　32．由比ガ浜 2－1037－1（1992 原）未報告　33．由比ガ浜 2-1034-1（1990～1991 原）原ほか 1993『市緊急調査報告書』9　34．由比ガ浜 2－1015－23（2000～2001 小山裕之）小山ほか 2005『由比ヶ浜中世集団墓地遺跡』玉川文化財研究所　35．由比ガ浜 2－1015－29（1989 大河内）大河内 1991『市緊急調査報告書』7　36．由比ガ浜 2－1023（1953・1956 鈴木尚ほか）　鈴木ほか 1956『材木座遺跡　鎌倉市材木座発見の中世遺跡とその人骨』東京大学人類学教室・岩波書店　37．由比ガ浜 2-1203-20（1998 原）原 2000『市緊急調査報告書』16　38．由比ガ浜 2‐1015‐1 ほか（2005 瀬田哲夫）瀬田ほか 2009『由比ガ浜中世集団墓地遺跡　鎌倉市由比ガ浜二丁目 1015－1 他地点』　有限会社鎌倉遺跡調査会
米町遺跡（№245）　39．大町 2－929（1988 福田）未報告　40．大町 2－933（1988 原）原ほか 1990『市緊急調査報告書』6　41．大町 2－2315（1993 馬淵）馬淵 1995『市緊急調査報告書』11　42．大町 2－391－1（1996 田代）田代ほか 1992『市緊急調査報告書』14　43．大町 2－2338－1（1997 宮田）滝澤 1999『米町遺跡発掘調査報告』）　44．大町 2－2312－4・10　（1998 斎木）斎木ほか 1999『米町遺跡』　45．大町 2－2313―15（1999 瀬田）瀬田 2001『市緊急調査報告書』17　46．大町 2－2308－1（1999 瀬田）瀬田 2001『市緊急調査報告書』17　47．大町 2－2320－1（2001 斉木）未報告　48．大町 2－2324－1（2001 馬淵）馬淵 2004『市緊急調査報告書』20　49．大町 2－993－3
材木座町屋遺跡　50．材木座 1－144―3（1990 木村）木村 1990『市緊急調査報告書』7　51．材木座 2－217－6（1993 瀬田）瀬田 1995『市緊急調査報告書』11　52．材木座 1－890－7（1998 汐見）汐見 2000『市緊急調査報告書』16　53．材木座 1－336－7（2000 宮田）森ほか 2001『材木座町屋遺跡発掘調査報告書』　54．材木座 1－919－19（2008）　55．材木座 1－893－19（2008）56．材木座 1－921－5　57．材木座 1－126－8
能蔵寺跡（Ｎo.314）　58．材木座 2－303（1971 大三輪）未報告（松尾宣方 1983『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報』1 に略報）59．材木座 2－297－7（2001 大河内）伊丹ほか 2003『市緊急調査報告書』19

ころどころで採集されている。市域東部の大倉幕府跡周辺の微高地では、荘柄天神社前で前期諸磯 b 期および中期阿玉台期の土器 14 点のほか、敲打痕のある石や獣骨が出土している。横浜国大付属小学校一帯でも後期称名寺式土器が発見され（赤星 1959）、近年では鎌倉駅周辺の沖積地でも前期から後期にかけての土器や石器がときに採集されている。縄文の海進範囲との関係が掴めないが、微高地では生活が営まれていたと考えられる。

弥生時代

海退に伴い、古鎌倉湾が次第に後退していく過程で支谷が生まれ、そこを流れる小河川と滑川の合流する付近に自然堤防の微高地が形成される。弥生時代の人々の生活はその上に営まれ始める。滑川と二階堂川が合流する市街地東域の大倉一帯に、弥生時代中期後半の宮ノ台期の集落がある（「大倉幕府周辺遺跡群」）。滑川沿いでは上流近くまで土器が採集されるので、河岸に広範囲に集落が形成されていたのだろう。海岸砂丘地帯では、弥生時代後期の祭祀遺構と思われる遺物が出土し、埋葬人骨や住居址が発見されたほか、弥生時代中期後半から古墳時代初頭の土壙墓群も発見された（「由比ヶ浜中世集団墓地遺跡」）。このほか北鎌倉台山・鎌倉山一帯にも集落が存在する（「台山遺跡」・「手広峰西遺跡」ほか）。

古墳時代

前期には鎌倉市の南西、逗子市と葉山町の境の相模湾を見下ろす桜山の丘陵上に、長柄桜山 1 号、2 号墳が築かれる。この古墳はいずれも全長 90m前後の前方後円墳で、県内のこれまでに発見された古墳としては最大級に属する。長柄桜山古墳群の地はのちの律令時代には鎌倉郡と御浦郡の境にあたり、相模湾を舞台とした地域統合が広範に進められていたことを物語る。古墳時代後期になると、鎌倉市街地では、砂丘地域で貝などを用いた祭祀遺構が点々と検出される。

またこの時期、横穴墓がほぼかつての郷毎に一箇所ずつ濃密に分布する地域が存在する。鎌倉郷に比定される地域では、御成町を中心とした滑川右岸の丘陵部に集中する。市域の西半部では極楽寺を中心とした地域に多い。現和田塚周辺は古い字を向原といい、現在は見る影もないが、高塚式円墳の向原古墳群があったとされる。「采女塚古墳」（「無常堂塚」）はその一つで、明治 28 年（1895）の『鎌倉旧蹟地誌』によれば円墳状に残っていたという。埴輪が発見されたのは明治 20 年（1887）のことで、六地蔵から由比ケ浜に向かう道の道路工事に際し、塚を切崩した時に人物埴輪三体の他に馬埴輪、円筒埴輪が出土したとされる。和田塚周辺から御成町一帯にかけては、ときどき埴輪片の出土がある（「今小路西遺跡御成小学校地点」など）。古墳時代後期から末期にかけて、沖積地を中心として生活痕は点々と残される

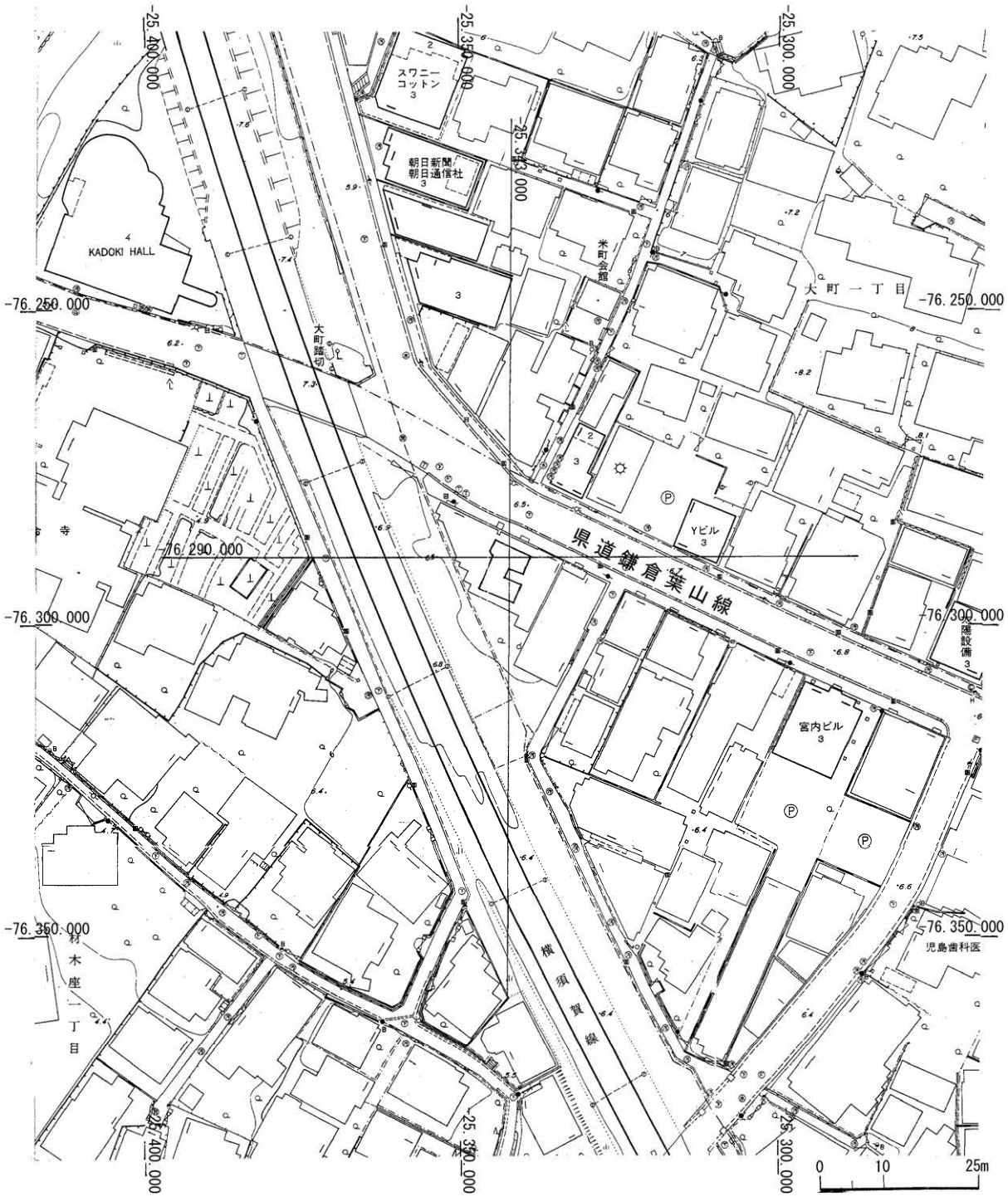


図 2　調査区位置図

が、集落としては調査例がない。

律令時代

この時代になると遺構・遺物は急増し、官衙、集落の発見がある。古代行政区画上の相模国は八郡で形成され、その内に鎌倉郡も含まれる。鎌倉郡は五つもしくは七つの郷で構成される。綾瀬市宮久保遺跡出土の「天平五年」銘木簡には鎌倉郷の名がある（天平五年は 733 年）。正倉院文書にも名はみられる。平安時代成立の「和名類聚鈔」（承平年間 931～937 成立）にも「鎌倉郷」の名がみられる。それらの史料により奈良時代前半の鎌倉郷に限ってみれば、高田王の食封三十戸と他の官戸二十戸が存在し、相模

国の一郷平均人口である 1521 人前後（竹内 1981）が暮らしていたとする推測が成立する。

今小路西遺跡（御成小学校地点）で鎌倉評もしくは郡家の政庁が発見されたのは、1985 年のことである。検出遺構は掘立柱建物 12 棟、礎石建物 5 棟、柵 9 条、池状凹地 1 基、溝 3 条などであり、8 世紀前半から 10 世紀初頭までの遺構、遺物の変遷をⅤ期に区分している。その後、周辺の発掘調査により官衙関連とおぼしい遺構が発見された。本調査地点にほど近い地点 53 では、掘立柱建物が 6 棟検出されている。報告者は建物の構成や遺跡の立地から、一般集落ではなく水上交通・運搬に関する機関とそれに付属する建物（居館）と指摘している（森 2001）。大上周三はこの遺跡に対し、水上交通、とりわけ郡衙の港湾施設、郡津も視野に入れたいとしつつも、検出された遺構、遺物から郡衙の交通関係に直接結びつく管理施設あるいは物流収蔵施設にすることはできないとし、立地からすると水陸交通関係の建物である蓋然性の高さを指摘している（大上 2009）。

こうした古代鎌倉の様相について菊川英政は、遺跡を砂丘域・郡衙域・周辺域に分けた上で、遺跡点数の変化から次のように説明する（菊川 1997）。

8 世紀前半に郡衙は砂丘後背地に付属舎群と共に存在する。それ以前 7 世紀後半に砂丘域で遺構・遺物とも多く見られるのは、菊川によれば、郡衙造営にともなう集団移住が行われたからであり、8 世紀前半に郡衙域に遺構・遺物の増加が見られるのはその存在からとする。その一方、このころから砂丘域では逆に急激に落ち込むことから、集落は郡衙が完成するまでの一時的な移住であったという。

9 世紀前半は砂丘域、郡衙域とも変化は見られないが、菊川によれば、後半に郡衙域だけ低くなるのは、鎌倉郡衙の消長に対応しているという。他地域に移転した確証がないことに加え、既存集落の撤去あるいは無住の耕地をつぶすにしても政庁域には広大な土地が必要であり、新たな集落の増加が抑えられるはずなので、政庁が同じ郡衙内へ移転したことによるとしている。

周辺域では 7 世紀中葉から遺跡は見られるが、主に 9 世紀を主体とした丘陵斜面あるいは尾根上で集落は形成される。このことに関して菊川は、9 世紀前半の急増は丘陵部への耕地拡大を図ったものであり、9 世紀後半で減少傾向にあるのは元慶二年（878）の大地震による可能性もあるとする。が、周辺域とした傾向が実は異なる地域の特徴が混在したものであり、地域的特徴の根底には立地が大きく関わっているとしている。10 世紀前半から後半にかけて砂丘域、郡衙域ともに減少傾向にあり、10 世紀後半は三域とも一定の遺跡を残し衰退する様子が観察されるが、10 世紀中葉から 11 世紀後半は律令制が崩壊する時期であり、一般集落遺跡においても住居件数が減少し、集落は解体する。鎌倉中心域の変化はそうした社会変化を反映した現象としている。

さて、大化改新（645）直後から宝亀二年（771）の五畿七道制の改編まで、鎌倉を東海道が通過していた。この街道がどこを通過していたかという問題は、それ以後の鎌倉の町構造を規定する重要な点なので、簡単に触れておきたい。

東海道が鎌倉に入る経路は、ほぼ次の二系統が想定される。一本は、相模国府から海岸沿いに鎌倉郡に至り、稲村ケ崎と霊山ケ崎の間の鞍部を越えて鎌倉湾側に抜け、稲瀬川河口から鎌倉郷に入る経路である。もう一本は、海老名から藤沢下土棚を経て、藤沢市川名から鎌倉に入る。この場合は、明治時代に敷設された横須賀水道路（すいどうみち）（横須賀水道上に敷設された道）にほぼ重なる（木下 1997）。以上二経路のいずれも考古資料による検証はまだされていない。またどちらであっても、その先、鎌倉郷を横断する経路にも二系統が想定されている。すなわち、ほぼ六地蔵交差点から現在の下馬四ツ角交差点を東に渡ったあと、やはり現在の大町四ツ角から小坪方面へ抜ける経路と、その道よりも一本南の、六地蔵交差点から私立中高校の北側を通り小坪に抜ける経路である。前者はもちろん本調査地点北側の県道鎌倉葉

山線だが、南を通る道であってもここからは至近の位置にある。一帯のどこからも基盤層近くから古代の土器が出土するのは、そのことが背景にあるのだろう。古官道の道筋は中世鎌倉の都市構造を解明する上で大変重要な問題であり、今後も注視していく必要がある。

王朝国家時代

源氏が鎌倉に入ってきて礎を築いた時代である。集落は、基本的には源氏居館の存在していたであろう中核部と、それを囲む幹線道路で構成される。北の山際と南の海岸寄りに東西の道が通じ、それを南北の道でつなぐ。北の山際の道は武蔵の六浦津との往還路である。六浦津は東海道の経路変更後衰退したと考えられる三（御）浦走水（馳水）に替わって盛んになったのであろう。この往還路はのちに「六浦道」と呼ばれるようになる。鎌倉側の終点（起点）は、現在の寿福寺の地にあった源義朝の居館「鎌倉之楯」であった。南の海岸寄りの東西道はかつての東海道である。この 2 本の東西道のそれぞれの左右には守護神が置かれ（坂ノ下御霊神社・大町八雲神社・荏柄天神社・佐助稲荷社）、集落を保護する（馬淵 1994）。

この時代にはほかにもいくつかの寺社が開創されている。市街地西南部に位置する甘縄神明社は、和銅三年（710）に行基が開いたと伝えるが、実際には全国に御厨の設置が盛んになる平安時代後期の草創であろう。大庭御厨の東端に当たるか、あるいは飛地があったらしく、そのためここに祀られたともいわれる（高柳 1959）。11 世紀中葉、勅定により相模守として下向した源頼義は、当社に祈って、康平六年（1063）に社を修復、永保元年（1081）嫡子八幡太郎義家がさらに修理の手を加えた。六浦道に面した杉本寺は、寺伝に天平六年（736）行基が開いたとされるが徴証はない。仏像等の蔵品からみて、これも開創は平安時代後期とすべきであろう（馬淵ほか 2002）。なおこの寺は、『吾妻鏡』では終始「大倉観音堂」の名で呼ばれている。

この時代、調査地点に近い場所の記事としては、由比若宮がある。「康平六年（1063）秋八月」、源頼義は潜かに石清水を勧請することとし、由比郷に瑞籬を営む（『吾妻鏡』）。18 年後の永保元年（1081）2 月、これも甘縄神明社と同様、子義家が修復を加えたという。八幡神を置く場所にこの地を選んだ理由はわからない。今でこそ海岸からは遠いが、明治以前はここから 300m前後の近さまで潟湖が湾入していた。あるいは汀線近くを古街道（律令時代の東海道か）が通過しており、そこが参道の起点となったのだろうか。

鎌倉時代

治承四年（1180）、源頼朝が鎌倉に入り、大倉に幕府を開いた。このとき旧来の集落構造の上に鶴岡八幡宮と若宮大路が置かれ、現代まで続く町並の骨格ができ上がる。調査地点は先述のとおり県道鎌倉葉山線に臨む場所にある。この県道の前身となったであろう中世の街路の敷設が、このときであったかどうかはわからない。しかし、下馬四ツ角から西の山麓（現私立御成中学校門前）に向かって若宮大路に直交する道が付けられ、東は名越山麓まで至る直線的な街路が通じたのは、それからほどなくのことだったはずである。和田合戦について記した『吾妻鏡』建保元年（1213）五月二日条に、「米町辻、大町大路等之切処」とみえ、この頃にはもうあることがわかる。「米町辻」とは現在の「大町四ツ角」のことであろう。「切処」は、戦いの先端、といったほどの意味か。

県道鎌倉葉山線が歴史的に何であったか、すなわち鎌倉時代の「大町大路」であったかどうか、また律令時代の東海道であったかどうかについては議論がある。この点に関しては、馬淵ほか 2007 第一章、および馬淵ほか 2008 第一・四章等を参照してほしい。

「下馬」の名称は、鶴岡八幡宮に対して下馬の礼を取るところからきている。したがって、この地名は鎌倉時代初期におこったものであろう。『吾妻鏡』の中では「中（の）下馬橋」「下（の）下馬橋」が出てくる。「下馬」の近くに作られた橋のため「下馬橋」と呼ばれたと言われている。観応三年（1352）九月三日の将軍足利尊氏御教書（県史三）に「若宮小路三箇所橋造営」と見えることから、若宮大路上・中・下それぞれの下馬に橋が架かっていた可能性が高いが、「上（の）下馬橋」は史料に現われない。

『吾妻鏡』によると「中下馬橋」の初見は建保元年（1213）五月一日条で、今の二ノ鳥居付近であることがわかる。「下下馬橋」は、県道鎌倉葉山線が若宮大路と交差する今の下馬四ツ角付近にあった。『吾妻鏡』による「下下馬」の初見は仁治二年（1241）十一月二九日条であり、それによれば、下下馬のあたりは若宮大路を挟んで東西の両側に「好色家」（妓楼か）が並び、武士たちの「酒宴乱舞会」の催される繁華な場所であった。しかし『快元僧都記』天文三年（1534）六月一六日条に出てくる「下ノ下馬」は「七度行路」とともに「下馬橋二ヶ所」修理の歓進状であり、この頃には若宮大路の荒廃とともに中ノ下馬橋、下ノ下馬橋はしばしば破損し修理を要する状態であったようだ。調査地点周辺を描いた、明応年間（1492－1501）頃作成された「善宝寺寺地図」を見ると、図下方の「置石」と注されるのは若宮大路の段葛であり、滑川に架かる橋は現在の下馬四ツ角近くの延命寺橋であろう（図版 1）。明応頃の段葛は下馬四ツ角近くまで存在していたことがわかる。延命寺橋から米町と注する道筋は若宮大路から大町四ツ角、名越を経て逗子へ通じる現在の県道鎌倉葉山線に相当し、連なる家並みは繁華であった様子を彷彿とさせる。今回の調査地点は正しくこの辺りである。

鎌倉幕府は建長三年（1251）十二月三日と文永二年（1265）三月五日の二度、市中の商業地区を指定する法令を出した。前者に「米町」の名が見え、後者にもその異称とみられる「穀町」の地名がある。県道鎌倉葉山線沿いに大町・米町・魚町の三地区を集めた点には、それより海岸寄りを異域と明確に認識したことがうかがえるという見方もある（馬淵 1998）。この帯状の一帯は内にも外にも属さない極めて両義的な場所、彼岸と此岸との境を示す浜の大鳥居と、神域たる八幡宮領内を示す下馬四ツ角という、ふたつの境界標識に挟まれた場所である。（馬淵 1994）。米町は他に『吾妻鏡』の寛喜三年（1231）一月一六日条米町辺りの失火で「及横町南北六町余災出羽前司宅在此内」と記され、賑やかな商業地域で人家が立て込む一方で、有力御家人の屋敷のある場所でもあったことを表す。

2000 年に大町二丁目 2312 番地 10・二丁目 2312 番 4 安養院の西側「米町遺跡」（地点 44・45）で検出された 8 枚の版築面は全体の広がりが掴めないため性格を推定するのは難しいとしながらも、性格としては道路を考えたいとし、下馬から名越方向に向かう「車大路」もしくは「古い東海道」の可能性を指摘している（斎木ほか 2000）。ただしこの見解については異論も出ている（馬淵ほか 2004）。

調査地点は県道鎌倉葉山線に面するが、この道は果たして中世期の「大町大路」と比定できるのであろうか。これについては今まで各方面から検討されているが調査地点に近い「小町大路」「車大路」の範囲も今だ明確にされておらず、おのずと「大町大路」の範囲も不明のままである。

南北朝時代以後

大町は中世後期にも商職人ら、いわゆる「町衆」の賑やかに行き交う町であった。鎌倉祇園会と呼ばれる大町祇園社（現八雲神社）の祭礼を担ったのは彼らである（藤木 1993）。天正 14 年（1586）、北条氏直は鎌倉祇園祭における喧嘩口論や押買等についての禁制を出している（『鎌倉市史　史料編』１－403）。町衆の多くは日蓮宗徒で、浄土宗徒もいた（松尾 1993，湯浅 1994）。津久井郡光明寺には「善宝寺寺地図」とともに、明応六年（1497）七月二十五日付「善法（宝）寺分年貢注文」が存在する。そこには寺領内の作人十数人の年貢額が記されている。作人名の肩には米町をはじめ

中座・塗子または辻子といった地名、日常物屋・紙屋・銀細工・塗しなどの職業が書かれている（『神奈川県史　資料編』３－6410）。善宝寺は調査地点のすぐ北側に位置する。中世末期における門前の、それもおそらくは通り沿いの賑わいがよくうかがえよう。

鎌倉時代後期、法華経を奉じる日蓮は名越山麓を拠点として盛んな布教活動をおこなった。その宗派は当初名越付近に押しとどめられていたが、鎌倉幕府崩壊後徐々に鎌倉市内中心部に進出する。調査地点はその寺域内であった可能性もあろう。日蓮宗の教線拡大の実態と、そのなかでの大町・名越一帯の位置付けは，今後の重要な課題である。

（根本・馬淵=補綴）

※引用・参考文献は第四章末に一括

第二章　調査の概略

1．調査にいたる経緯

本調査地点は市内のほぼ中心部に所在し、逗子方面に通じる県道鎌倉葉山線の下馬交差点のやや東になる県道の南側、大町二丁目に位置している。鋼管杭の設置による基礎工事を内容とする個人専用住宅の建設が調査原因であったが、発掘調査の着手前に鋼管杭打設が行われるという不本意な状況の下で、急遽調査を開始した。

2．調査方法

調査時の測量は便宜上、街区に合わせて任意に設定した方眼を使用した。国土座標鎌倉市４級点(U131・U132)を基点にして調査地点の座標を計測した後、測量方眼を座標系に変換したものを本報に掲載した。調査区はＸ－76 289～76 297、Ｙ－25 338～25 347（エリア９）の範囲にある。

3．調査の経過

調査は平成 17 年２月２日～同年２月 28 日の期間を要した。主な作業内容は以下のとおり

２月２日（水）　重機による表土掘削。機材搬入。
２月３日（木）　中世面の遺構確認作業開始。
２月 10 日（木）　溝１ほぼ完掘。南半部写真撮影。
２月 12 日（土）　Ｉ面全景撮影。
２月 18 日（金）　溝２掘り上げ。
２月 21 日（月）　２回目の全景撮影。
２月 22 日（火）　調査区南壁際深掘り。
２月 23 日（水）　調査区東壁深掘り、調査壁土層断面図実測。
２月 24 日（木）　遺構個別写真撮影。撤収準備。
２月 28 日（木）　機材撤収。

（松原）

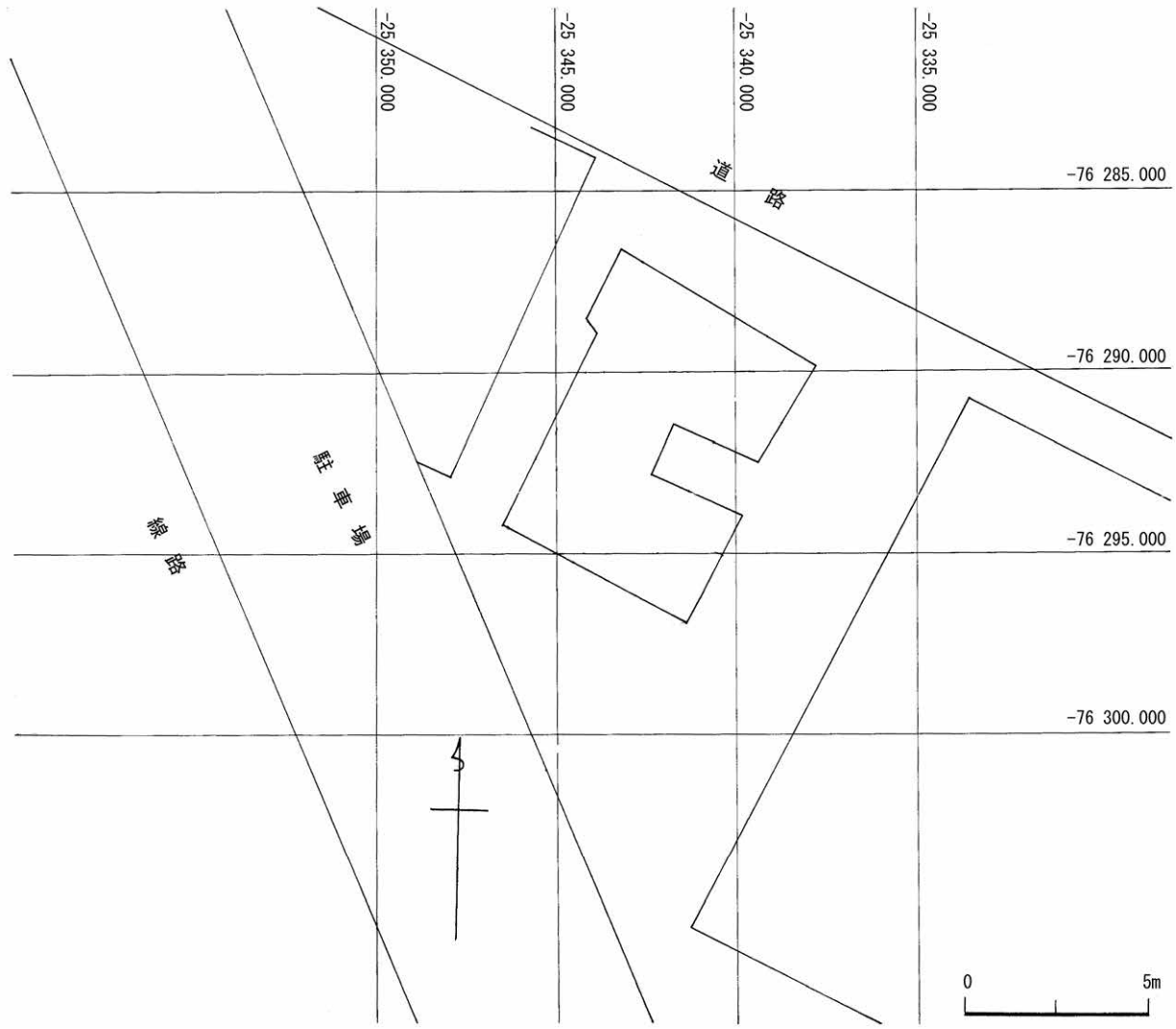


図 3　調査区設定図

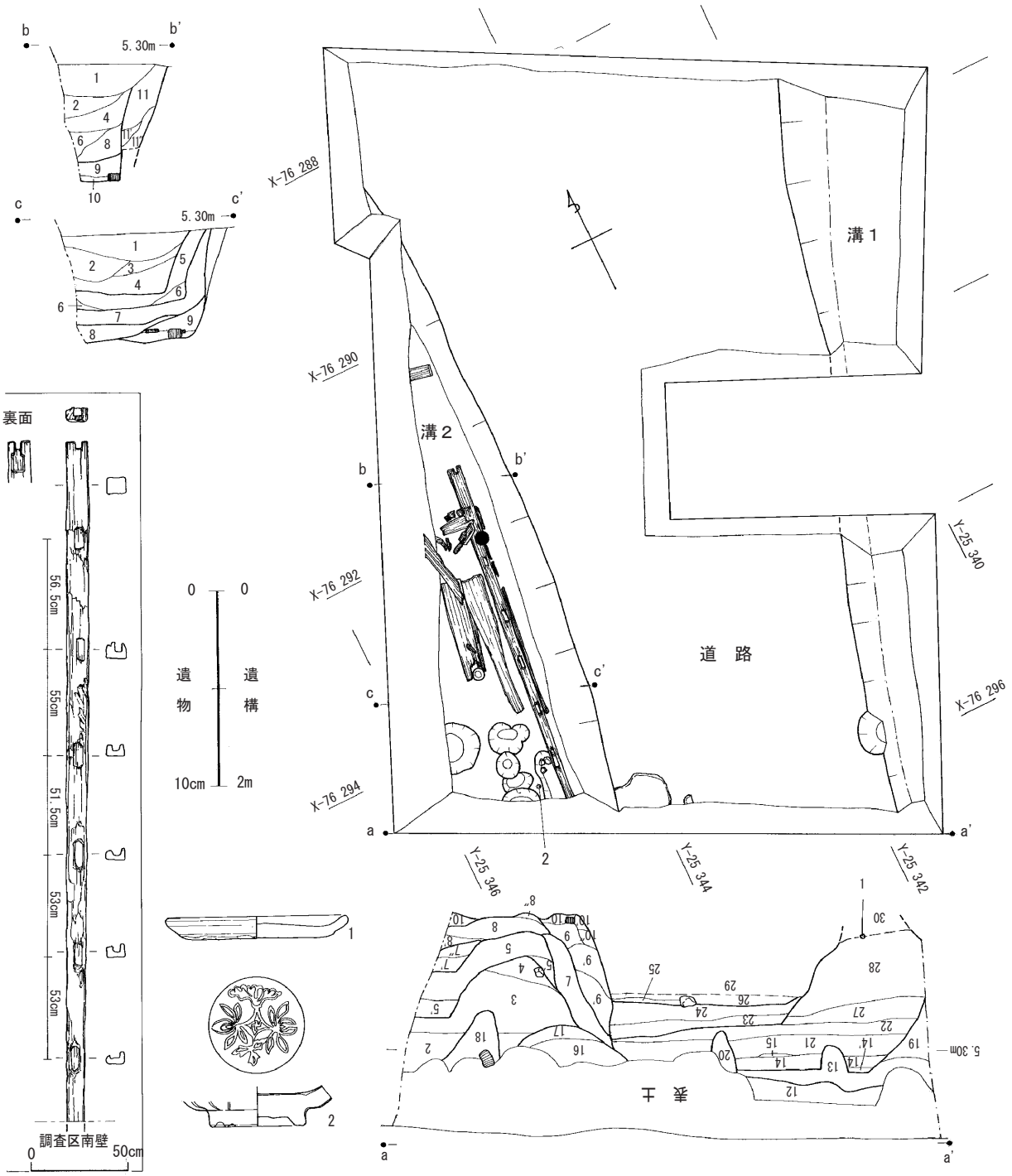
第三章　調査結果

第１節　層序と面の概要

現地表の標高は 6.3～6.4ｍで、40 ㎝～90 ㎝ほどの厚みの表土を除くと、下にすぐ中世層が現われる。この中世層は泥岩粒子や炭化物を多く含む暗灰褐色砂質土で、10 ㎝前後の厚みがある（図 4 土層番号 13)。遺構面は調査区中央部に南北に細長く残っており、その最上部で標高 5.7ｍ前後となる。両横は急傾斜で直線的に落ち、これはのちに道路とその側溝であると判断した。道路は子午線に近い主軸方位を持ち、幅 2.8～4.2ｍで、北に行くほど広い。

道路遺構最上面から 45 ㎝前後下に初期の道路があるが、上述の道路はそれを拡幅する形で構築されている。このとき当初の側溝は、厚さ 50 ㎝前後の暗茶褐色ないしは暗褐色の砂質土で埋められている（図 4 土層番号 21・22)。

初期道路は二層の暗褐色砂質土で構成される。いずれも泥岩や土器片を少量含む土である（図 4 土層番号 23・24)。



1　暗茶褐色砂質土　2層に類似、やや明るい。泥岩粒・炭・土師器片含む。
2　暗茶褐色砂質土　やや暗めの土。泥岩粒・土師器片・貝含む。
3　暗黄茶色砂質土　１～３cmの泥岩多く含む。
4　暗茶褐色砂質土　10cm大の泥岩・凝灰岩・土師器片・炭・貝含む。
5　暗茶褐色砂質土　1～3cm大の泥岩・少量の炭化物・やや多めの貝含む。
5″ 暗灰色砂質土　泥岩多く、少量の炭化物含む。
5″ 暗灰褐色砂質土　土師器片多く、泥岩粒・炭化物・貝粒・褐鉄含む。
6　暗灰茶色砂質土　1～3cmの泥岩含む。　溝２
7　暗灰褐色砂質土　1～3cmの泥岩含む、土師器片・少量の炭含む。
7″ 灰褐色粘質土　泥岩粒・貝片・炭化物を含む。
7″ 灰褐色粘質土　黄灰色砂混入・炭化物・貝粒・土師器片・泥岩粒含む。
8　暗灰褐色粘質土　1～5cmの泥岩・若干の貝を含む。
8″ 暗灰褐色粘質土　泥岩粒・土師器片・貝粒・炭化物を含む。
8″ 暗茶色砂質土　地山との混入度。泥岩粒・土師器片・貝粒・炭化物を含む。
9　暗灰色砂質土　1～3cmの泥岩を含む。
9″ 暗茶褐色砂質土　土師器片・泥岩粒・炭化物を含む。
9″ 暗茶褐色砂質土　土師器片・泥岩粒・炭化物を含む。
10　黄茶色砂質土　地山との混入度。
10″ 暗黄茶色砂質土　混入物少ない、若干の貝片を含む。
10″ 暗黄茶色砂質土　地山との混合層。
11　茶褐色砂質土　1～3cmの泥岩・土師器片・炭化物を含む。
12　暗灰褐色砂質土　木片多く、泥岩粒・炭化物含む。
13　暗灰褐色砂質土　泥岩粒・炭化物含む。
14　暗茶褐色砂質土　泥粒少量含む。締まりなし。
14″ 暗灰色砂質土　貝片含む。締まりなし。
15　黄茶色砂　土師器片他遺物多数含む。
16　暗茶褐色砂質土　17層と同質。締まりあり。
17　暗茶褐色砂質土　泥岩・土師器片・炭化物含む。キメ細かい。
18　暗茶褐色砂質土　泥岩・土師器片を非常に多く含む。
19　暗灰茶色砂質土　貝・貝粒を多く含む。泥岩・土師器・炭化物を含む。
20　暗灰褐色砂質土　色調ややくらめ。
21　暗茶褐色砂質土　泥岩粒・土師器片・炭化物含む。
22　暗褐色砂質土　24・26層より若干粗く明るめの土。
　　泥岩粒・土師器片・炭　　化物含む。
23　暗褐色砂質土　24層に類似、泥岩粒・土師器片を少量含む。
24　暗褐色砂質土　26層よりやや明るい。泥岩粒・炭化物を少量含む。
25　漆喰層
26　暗褐色砂質土　混入物非常に少ない。
27　暗茶褐色砂質土　混入物少ない。
28　暗茶褐色砂質土　泥岩・貝・炭化物・土師器片含む。　溝１
29　黄褐色砂層　風成砂，基盤層

図４　上層遺構群全図　調査区土層断面　同出土遺物

ここまでを上層遺構群と呼ぶ。

土層番号 23・24（図 4）の土を除くと、道路下の南側に明黄褐色の風成砂層が現れるが、自然堆積層はこの部分のみで、以北は黒褐色ないし暗黄褐色の粘質土となる。風成砂層のない北域 3 分の 2 については、深度規制により掘削できず、落ちていることのみ確認した。またこの層からは、上部を道路西側溝によって損なわれた大きめの円形の穴が 2 基（土坑 1・P.13）、調査区北端では浅い竪穴遺構の下部とみられる隅丸方形の土坑も検出された。

これらの遺構群を下層遺構群と呼ぶ。

第 2 節　各説

1. 上層遺構群

溝 1（図 4・5）

位　置：X－76 289～－76 297　Y－25 342～－25 338　　**規　模**：東西幅 180 ㎝以上×深さ 142cm 以上　**断面形**：（逆台形）　**流下方向**：南→北　　**主軸方位**：（N－17.5°－E）　**充填土**：図 4 に記載　**重複関係**：竪穴 1 を切る　**上層出土遺物**：土師器皿Ｔ種（1・2）・土師器皿Ｒ種（3～6）・瓦器火鉢（7・8）・伊勢系火鉢（9）・鞴羽口（10）・南部系山茶碗(11)・常滑片口鉢Ⅰ類（13～15）・同Ⅱ類（12・16～18）・渥美壺（19）・常滑甕(20～22)・磨耗陶片（23～26）・白磁口はげ皿（27）・同安窯系青磁皿(28・30)・竜泉窯青磁鎬蓮弁文碗(29)・磨耗石片（31）・砥石中砥(32・33)　**下層出土遺物**：磨耗陶片(34・35)・竜泉窯青磁画花文碗(36)　**特記事項**：東岸が調査区内に見えないため溝ではない可能性も消えない。しかし、本址西側の調査区中央部を南北に走る高まりに関して、これを挟んで反対側にも溝があるところから道路状遺構と認識できるので、本址もそれにともなう道路東側の側溝であるとみたい。溝は大きく二時期に分けられ、出土遺物からみて、上層は 13 世紀第 2 四半期から同第 3 四半期、下層もあまり変わらず 13 世紀前半に位置付けられる。この年代は次述の溝 2 にも共通しており、鎌倉時代中期にこの場所に道路が設けられたことがわかる（終末は上部が削り取られているためにわからない）。

溝 2（図 4～6）

位　置：X－76 288～－76 296　Y－25 344～－25 346　　**規　模**：東西幅 80 ㎝（上層溝）×深さ 79cm（同前）　**断面形**：逆台形　**流下方向**：南→北　　**主軸方位**：N－6.5°－E（根太ホゾ穴心々方位による）　**充填土**：図 4 に記載　**重複関係**：土坑 1 を切る　　**上層出土遺物(図 5)**：土師器皿Ｔ種（37・38）・土師器皿Ｒ種（39～41）・瓦器火鉢（42・43）・常滑片口鉢Ⅰ類（44）・同Ⅱ類（45）渥美甕（46）・常滑甕(47)・磨耗陶片（48～50）・白磁口はげ皿（51）・竜泉窯青磁折縁鉢(52)・竜泉窯青磁鎬蓮弁文碗(53・54)・祥符元寶(55)・砥石中砥（56）・使用痕のある石（57）　**下層出土遺物（図 6）**：土師器皿 R 種（1～3）・鍔鍋（4）・南部系山茶碗(5)・常滑片口鉢Ⅰ類（6～11）・同Ⅱ類（12～14）・渥美甕（15）・常滑甕(16～20)・磨耗陶片（21～24）・瀬戸仏華瓶(25)・瀬戸鉢(26)・平瓦(27・28)・白磁合子(29)・竜泉窯青磁酒会壺(30)・竜泉窯泉窯青磁鎬蓮弁文碗(31・32)・砥石仕上砥(33)・砥石中砥(34・35)　**最下層出土（図 6）**：磨耗陶片(36)・竜泉窯泉窯青磁画花文碗(36)　**特記事項**：少なくとも五時期に分けられる改修、もしくは浚渫がある。上層のものに木材はないが、最下層のものはホゾ穴のある根太を備え、底部に板材を敷く。上層は断面逆台形で明瞭に溝の形態をしているが、

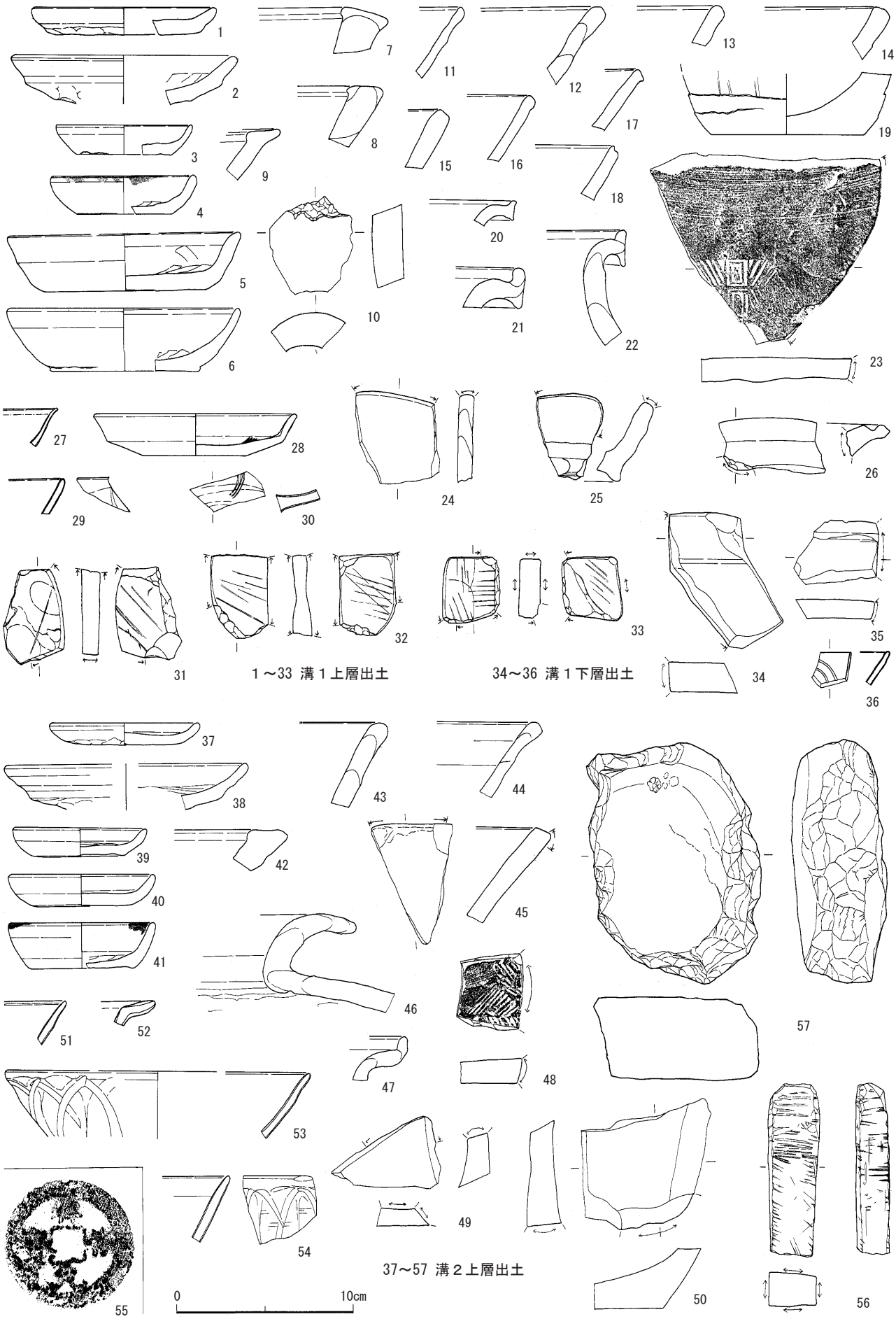


図５　溝１・溝２上層出土遺物

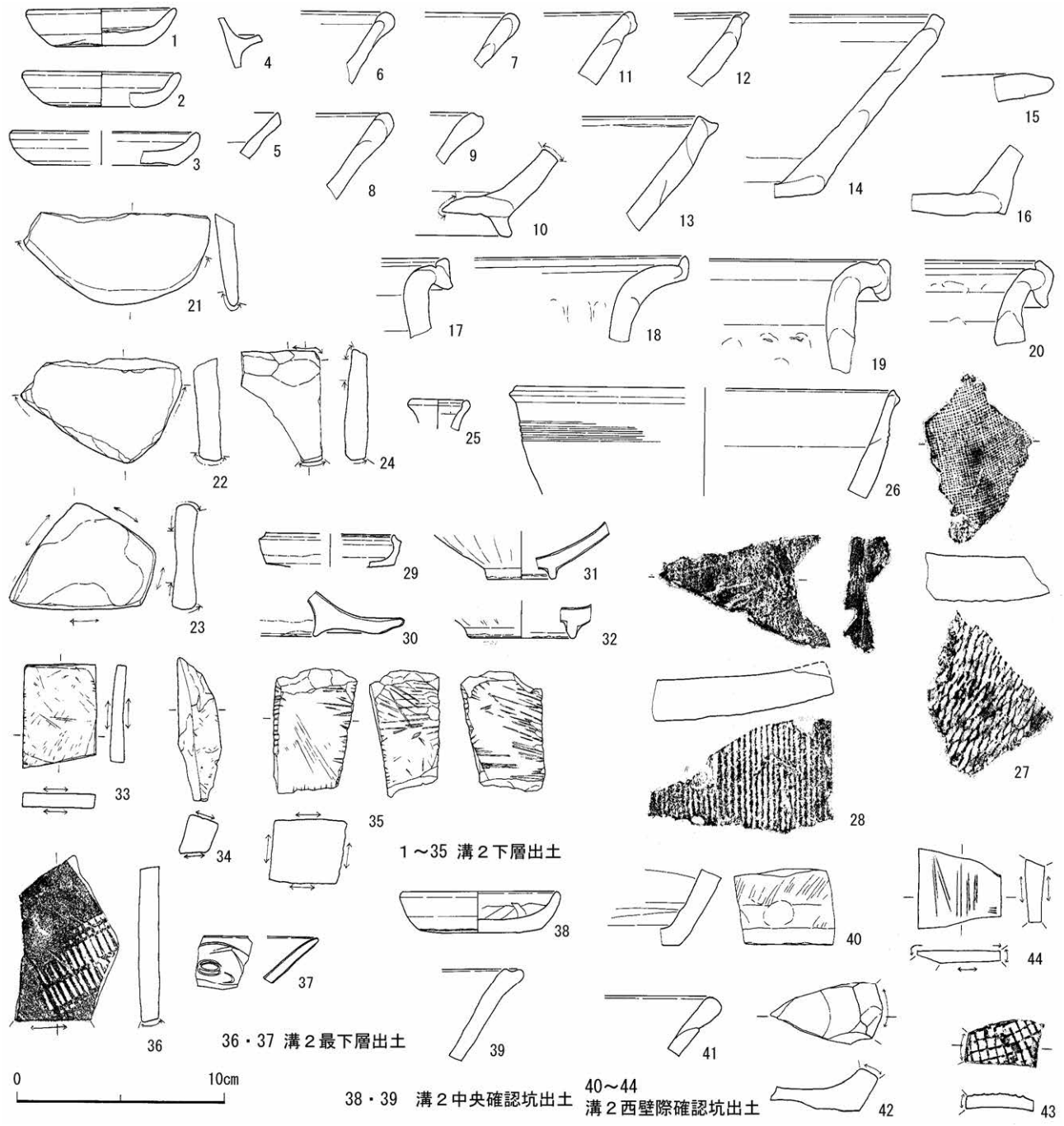


図６　溝２下層・同最下層・確認坑出土遺物

最下層の根太を有する遺構の西岸については、上層溝に削り取られて確認できない。根太（図 4）は溝木枠の束柱を立てるためのもので、底面東側壁際に残る。最大幅 11.3 ㎝、最大厚 8 ㎝の角材で、検出した長さは 353 ㎝、南調査壁に続く。貫通しないホゾ穴が 6 箇所穿たれ、ホゾの心々の距離は 51.5～56.5 ㎝、北端は「鎌継ぎ」の女木としてのホゾが彫り込まれている。根太の主軸方位はN－6.5°－E だが、溝掘り方自体は北に向かってやや西に湾曲している。標高は部材の上面で 4.1～4.18m。その他溝底付近では束柱と思われる部材・板状部材が出土している。底面近くから出土した竜泉窯泉窯青磁鎬蓮弁文碗については、図 4 に位置と実測図(2)を示した。出土遺物の年代は、かなり混乱が認められるが、上層・下層はいずれも 13 世紀代であり、最下層は 13 世紀前半中心と考えたい。

溝 2 関連確認坑（図 6）

出土遺物：土師器皿 R 種（38）・常滑片口鉢 I 類（39・41）・瓦器火鉢（40）・磨耗陶片（42・42）・砥石仕上砥(44)　**特記事項**：13 世紀代 2 四半期～第 3 四半期であろう。

道路状遺構（図 4）

位　置：X－76 288～－76 290　Y－25 341～－25 343　**規　模**：幅 420 ㎝以上　**平面形**：南に比べ北で幅が広がる　**断面形**：台形　**主軸方位**：(N－9°－E)　**重複関係**：竪穴 1・土坑 1 を切る　**出土遺物**：溝 1・2 出土遺物（図 5・6）参照　**特記事項**：若宮大路は N－26.5°－E であり、軸線を大きく異にする。おそらくすぐ北を通る東西の大路（「大町大路」か）に接続するのであろうが、接点自体は調査区内に見えていない。年代は上述の溝 1・2 の出土遺物から、13 世紀第 2 四半期頃には設置され、少なくとも 13 世紀後半までは存続する。廃絶期については、上部が完全に失われているため不明である。

上層遺構群包含層出土遺物（図 8）

土師器皿 R 種（1～4）・瓦器火鉢（5）・南部系山茶碗（6）・常滑片口鉢 I 類（7～9）・同Ⅱ類（10～15）・渥美甕（16）・常滑壺（17・18）・常滑甕(19・20)・磨耗陶片（21～23）・瀬戸仏華瓶（24）・砥石中砥（25・27）・砥石仕上砥（26）　**特記事項**： 13 世紀第 2 四半期を中心とする。全体にやや古く、13 世紀後半をほとんど見ない。

上層遺構面出土遺物（図 8）

土師器皿 T 種（28・31）・土師器皿 R 種（29・30・32～36）・白色系土師器皿（37）・瀬戸内系土師器碗（38）・楠葉型瓦器碗（39）・常滑片口鉢 I 類（40・41・43）・同Ⅱ類（42）・渥美甕（44）・磨耗陶片（45・46）・常滑甕(47・48)・青白磁香炉（49）・不明金属製品（50・51）・鉄釘（52～56）
特記事項：年代的には包含層と変わらず、13 世紀第 2 四半期のうちにおさまるが、楠葉型瓦器碗 39 は、あるいは 13 世紀中葉～第 3 四半期となるか。

2. 下層遺構群

竪穴 1（図 7）

位　置：X－76 288～－76 290　Y－25 341～－25 343　**規　模**：東西 315 ㎝以上×南北 110cm 以上×深さ約 46cm（底面高 4.88m）　**平面形**：(隅丸方形)　**断面形**：浅い逆台形　**主軸方位**： N－66°－W)　**重複関係**：道路状遺構および溝 1 に切られる　**出土遺物**：土師器皿 R 種（1）・土師器皿 T 種（2）・連歯下駄（3）　**特記事項**：北半は調査区外にあり、東辺は溝 1 に削り取られているので規模は不明。中世のいわゆる「竪穴建物」とはいえない。

土坑 1（図 7）

位　置：X－76 289～－76 292　Y－25 343～－25 345　**規　模**：東西 105 ㎝以上×南北 190cm×深さ約 135cm（底面高 3.90m）　**平面形**：円形　**断面形**：逆台形　**主軸方位**：不明　**重複関係**：溝 2 に切られる　**出土遺物**：土師器皿 T 種（4・5）・土師器皿 R 種（6・7）・常滑片口鉢 I 類（8・9）・同Ⅱ類（10）・常滑甕(11・12)・磨耗陶片（13）・青白磁梅瓶（14）・竜泉窯青磁稜花碗(15)　**特記事項**：充填土の大半が失われていたが、明茶褐色繊維質の柔弱な土が下層に残っており、周辺の事例とあわ

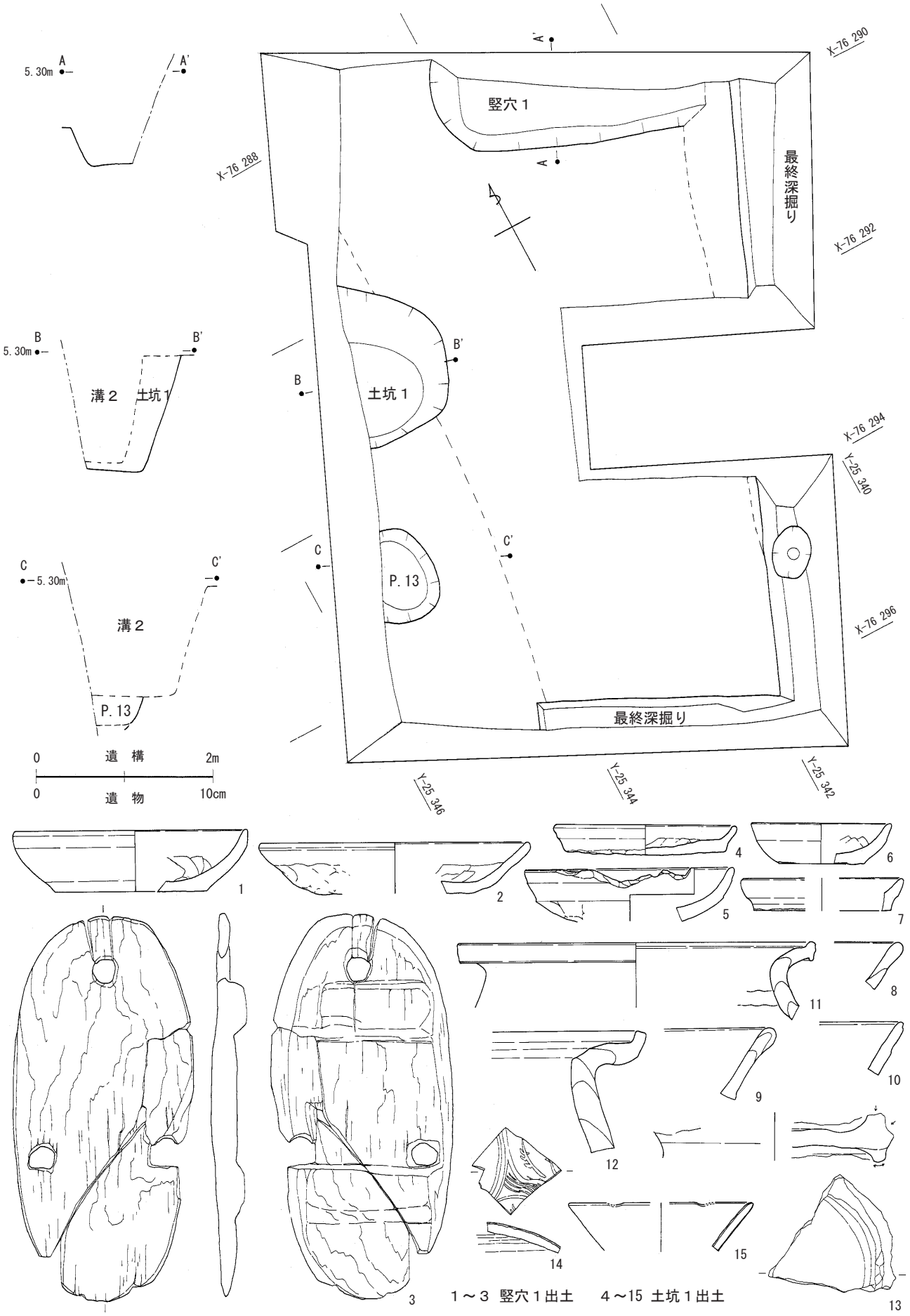


図７　下層遺構群全図　竪穴１・土坑１出土遺物

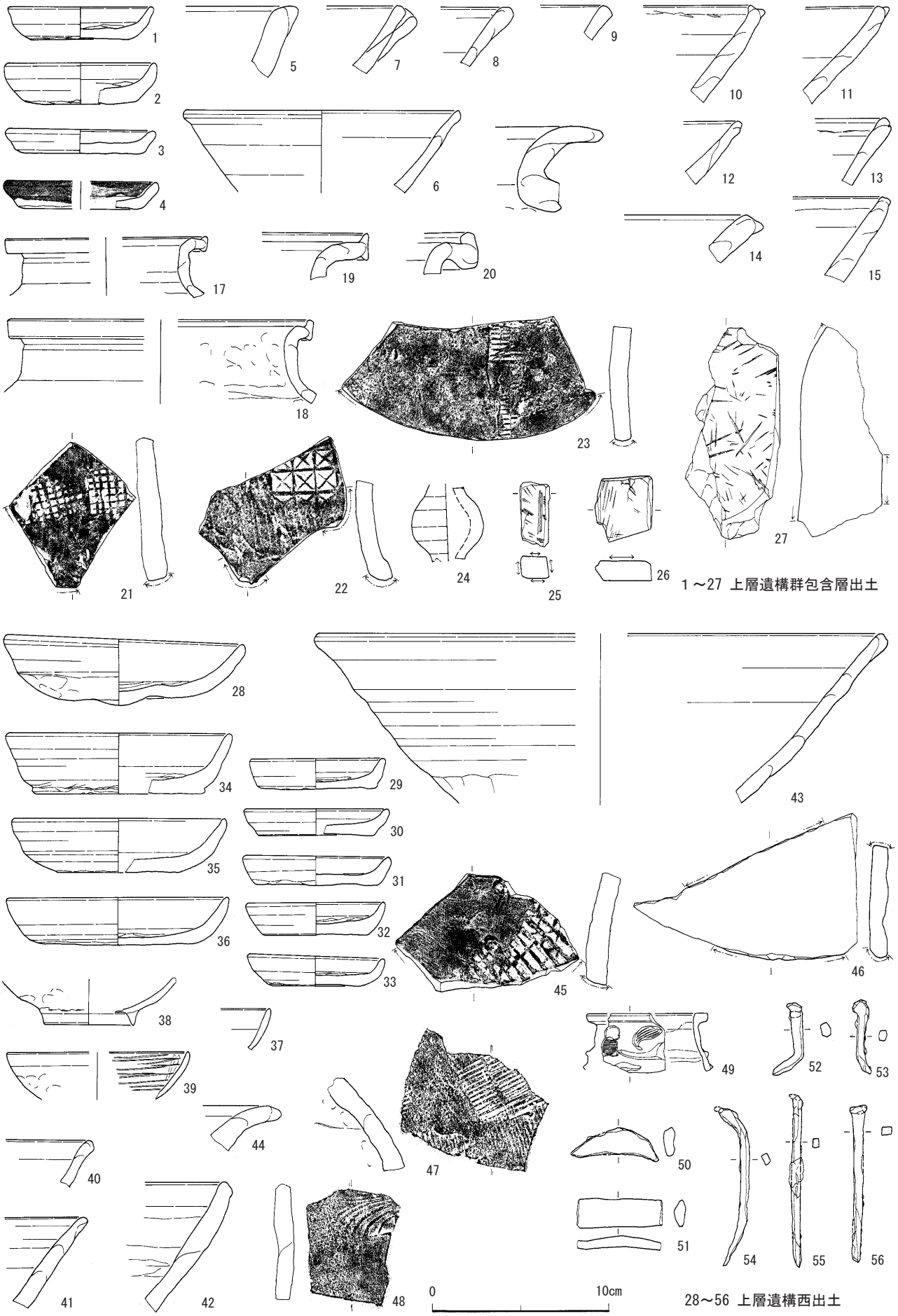


図８　上層遺構群包含層・上層遺構面出土遺物

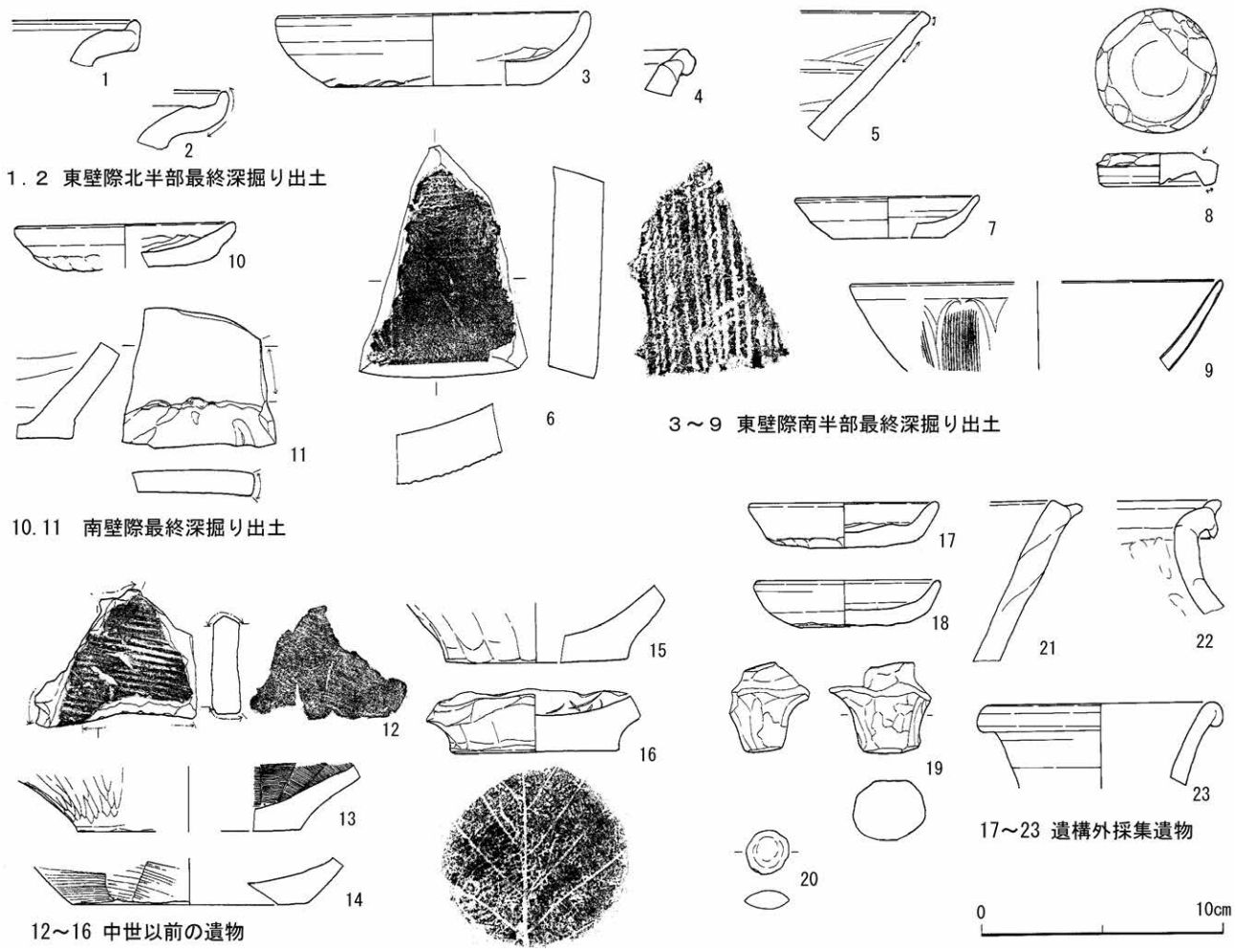


図９　最終深掘り出土遺物、中世以前の遺物、遺構外採集遺物

せて考えると（馬淵 1998)、便槽の可能性もある。

3．採集遺物

東壁際北半部最終深掘り（図 9）

出土遺物：常滑甕(1)・磨耗陶片（2）　**特記事項**：2 は常滑甕口縁部転用。年代はともに 13 世紀前半におさまる。

東壁際南半部最終深掘り（図 9）

出土遺物：土師器皿 R 種（3）常滑片口鉢Ⅱ類（4)・磨耗陶片（5)・平瓦（6)・東遠系山皿（7)・同安窯系青磁碗(8)・竜泉窯青磁櫛描蓮弁文碗(9)・**特記事項**：5 は常滑片口鉢Ⅱ類転用。全体に 13 世紀前半の様相を呈する。

南壁際最終深掘り（図 9）

出土遺物：土師器皿 T 種（10)・磨耗陶片（11）**特記事項**：10 は 13 世紀前半までに属する。

中世以前の遺物（図 9）

須恵器甕（12)・壺型土器（13～16）　**特記事項**：古代の土器はほかにも何点か出土している。古墳時代後期から律令時代にかけて、かなりの人が住んでいたのであろう。

遺構外出土遺物（図 9）

土師器皿 T 種（17)・土師器皿 R 種（18)・瓦器火鉢（19)・土製品（20)・常滑片口鉢Ⅱ類（21)・常滑甕（22)・瀬戸四耳壺（23）　**特記事項**：全体に 13 世紀第 2 四半期～同第 3 四半期の様相を呈し、これまでにみてきた遺構出土遺物の年代観から逸脱していない。

4．鋳造関係の遺物

出土点数：鞴の羽口破片 16 点・鉱滓 22 点他砕片　**総重量**：2178ｇ　**特記事項**：図示できるものはなかったが、遺構・層位を問わずまんべんなく出土している。特に多いのは溝２下層で、鉄滓のほかに鉄皿の可能性のある金属塊・薄い棒状の鉄片・板状の鉄片複数も出土している。面積比でいえば数量的には明らかに多い。この点については第四章であらためて触れる。

（松原・馬淵=補綴）

出土遺物観察表（1）

挿図番号	出土遺構・層位	種別	備考
図4－1	調査区南壁	土師器皿T種小型	口径(9.2)cm　器高1.15cm　手捏ね後口縁部内底部ナデ　胎土は赤橙色、赤色粒子・白色粒子・微砂粒・海綿骨芯を含む粉質土
2	溝2覆土	竜泉窯青磁鎬蓮弁文碗	底径4.8cm　ロクロ成形　素地は淡灰色、黒色微粒子含む　釉は灰緑色半透明、細かい気泡含む　内底面は蓮華文の押印文で表面に多少使用によるキズがある　外底部は畳み付きより内側露胎　Ⅱ類
図5－1	溝1上層	土師器皿T種小型	口径(10.2)cm　器高1.65cm　手捏ね後口縁部内底部ナデ　胎土は淡赤橙色、海綿骨芯・砂粒を含む弱粉質土
2	溝1上層	土師器皿T種大型	口径(12.4)cm　手捏ね後口縁部内底部ナデ　胎土は淡橙色、赤色粒子・白色粒子・微砂粒・海綿骨芯を含む弱粉質土
3	溝1上層	土師器皿R種小型	口径(7.8)cm　底径(5.3)cm　器高1.6cm　右回転ロクロ　底面糸切り、 内底部ナデ　胎土は赤橙色、微砂粒・赤色粒子・海綿骨芯を含む弱砂質土
4	溝1上層	土師器皿R種小型	口径(8.0)cm　底径(5.4)cm　器高2.2cm　右回転ロクロ　底面糸切り、板状圧痕あり　内底部ナデ　胎土は淡褐色、微砂粒・白色粒子・赤色粒子・海綿骨芯を含む弱粉質土　口縁部の一部に油煤付着
5	溝1上層	土師器皿R種大型	口径(13.2)cm　底径(9.2)cm　器高3.3cm　回転ロクロ　底面糸切り、板状圧痕あり　内底部ナデ　胎土は赤橙色、微砂粒・赤色粒子・海綿骨芯を含む　やや粗土
6	溝1上層	土師器皿R種大型	口径(13.0)cm　底径(8.9)cm　器高3.6cm　回転ロクロ　底面糸切り、内底部ナデ　胎土は淡橙色、微砂粒・赤色粒子・海綿骨芯・泥岩粒・気孔を含む粗土
7	溝1上層	瓦器火鉢	口縁部片　輪積み成形　　胎土は灰褐色～灰橙色、白色粒・赤色粒・気孔・多量の微砂粒を含む砂質土
8	溝1上層	瓦器火鉢	口縁部片　輪積み成形　　胎土は灰褐色～灰橙色、白色粒・気孔・多量の微砂粒を含む砂質土
9	溝1上層	伊勢系火鉢	口縁部片　輪積み成形　　胎土は灰黒色、白色粒・金雲母・多量の砂粒を含む砂質土　器表は浅黄橙色
10	溝1上層	鞴　羽口	胎土は淡橙色～橙色、白色粒子・海綿骨芯・泥岩粒・気孔・多量の砂粒を含む粗土
11	溝1上層	南部系山茶碗	口縁部片　ロクロ成形　　胎土は白色粒・気孔を含む粗い灰色土
12	溝1上層	常滑片口鉢Ⅱ類	口縁部片　輪積み成形　胎土は多量の長石粒・石英粒を含む灰黒色土　器表は赤褐色
13	溝1上層	常滑片口鉢Ⅰ類	口縁部片　輪積み成形　胎土は石粒・石英粒を含む灰色土
14	溝1上層	常滑片口鉢Ⅰ類	口縁部片　輪積み成形　胎土は白色粒・砂粒・気孔含む淡赤灰色土　二次焼成あり
15	溝1上層	常滑片口鉢Ⅰ類	口縁部片　輪積み成形　胎土は白色粒・砂粒・礫を含む黄灰色土　器表は明褐色
16	溝1上層	常滑片口鉢Ⅱ類	口縁部片　輪積み成形　胎土は長石粒・砂粒を含む暗灰色土　器表は茶褐色
17	溝1上層	常滑片口鉢Ⅱ類	口縁部片　輪積み成形　胎土は長石粒・石英粒を少し含む暗灰色土　器表は暗赤褐色
18	溝1上層	常滑片口鉢Ⅱ類	口縁部片　輪積み成形　胎土は砂粒・石英粒を含む鈍い橙色土　器表は暗赤褐色
19	溝1上層	渥美　壺	底径(8.8)cm　胎土は灰色、微砂粒を含む
20	溝1上層	常滑　甕	口縁部片　器表は暗赤褐色　胎土は白色粒子・黒色粒を含む暗灰色
21	溝1上層	常滑　甕	口縁部片　器表は暗赤褐色　胎土は白色粒子・黒色粒を含む粘性の強い灰色土
22	溝1上層	常滑　甕	口縁部片　器表は暗赤褐色　胎土は長石粒・石英粒を含む暗灰色土
23	溝1上層	磨耗陶片	縦10.6cm　横13.2cm　厚さ1.4cm　常滑甕胴部使用　胎土は長石粒・石英粒・泥岩粒を含む灰色土　斜線と矩形を組み合わせた叩き目あり　周辺の一辺が使用により軽く磨耗
24	溝1上層	磨耗陶片	縦5.5cm　横4.5cm　厚さ0.9cm　常滑片口鉢Ⅱ類口縁部使用　胎土は長石粒・石英粒・砂粒む黄灰色土　口縁の部分が丸みを帯びて磨耗
25	溝1上層	磨耗陶片	縦4.7cm　横3.8cm　厚さ1.4cm　常滑片口鉢Ⅰ類底部使用　胎土は長石粒・石英粒・黒色粒・砂粒・気孔含む明灰色土　周辺の2辺が丸みを帯びて磨耗
26	溝1上層	磨耗陶片	縦2.7cm　横5.4cm　厚さ1.3cm　常滑甕口縁部使用　胎土は長石粒・石英粒・黒色粒・砂粒・礫を含む灰色土　口縁部が磨耗
27	溝1上層	白磁　口はげ皿	口縁部片　ロクロ成形　　胎土は淡灰色、微砂粒を含み緻密　釉は緑色を帯びた灰色、半透明
28	溝1上層	同安窯系青磁皿	口径(11.4)cm　底径(5.9)cm　器高2.4cm　ロクロ成形　　素地は黒色粒含む明灰色、粗めの弱粘質土　釉は淡緑色、半透明　粗めの貫入少し入る　内底部に櫛描画花文　外底部露胎
29	溝1上層	竜泉窯青磁鎬蓮弁文碗	口縁部片　ロクロ成形　素地は淡灰色、緻密　釉は淡灰青色半透明、細かい気泡含む　内側に撮過傷あり
30	溝1上層	同安窯系青磁皿	胴部片　ロクロ成形　素地は明灰褐色、弱粘質土　釉は淡緑灰色、透明　粗めの貫入入る　内側に櫛描文
31	溝1上層	磨耗石片	遺存長(3.6)cm　横5.3cm　最大厚(1.3)cm
32	溝1上層	砥石　中砥	遺存長(4.8)cm　幅3.2cm　最大厚(1.3)cm　淡緑灰色　砥面4面　上野産
33	溝1上層	砥石　中砥	遺存長(3.8)cm　幅3.2cm　厚1.2cm　黄灰白色　砥面5面　天草産
34	溝1下層	磨耗陶片	縦7.8cm　横4.7cm　厚さ2.1cm　瓦器火鉢口縁部片使用　胎土は灰橙色～灰色、白色粒・砂粒を含む　断面の一辺が磨耗
35	溝1下層	磨耗陶片	縦3.5cm　横4.9cm　厚さ1.2cm　常滑片口鉢Ⅱ類口縁部片使用　胎土は灰色、白色粒・橙色粒を含む　器表は茶褐色　断面の一辺が磨耗　口縁部の両端は打ち欠いてある
36	溝1下層	竜泉窯青磁画花文碗	口縁部片　ロクロ成形　素地は淡灰色、やや粗いが堅緻　釉は淡灰緑色半透明、貫入少し入る
37	溝2上層	土師器皿T種小型	口径(8.35)cm　器高1.3cm　手捏ね後口縁部内底部ナデ　胎土は淡橙色、赤色粒子・白色粒子・微砂粒を含む
38	溝2上層	土師器皿T種大型	口径(13.6)cm　手捏ね後口縁部内底部ナデ　胎土は橙色、海綿骨芯・微砂粒を含む
39	溝2上層	土師器皿R種小型	口径7.4cm　底径5.3cm　器高1.6cm　右回転ロクロ　底面糸切り、薄く板状痕あり　内底部ナデ　胎土は淡橙色、砂粒・白色粒子・泥岩粒を含む弱砂質土
40	溝2上層	土師器皿R種小型	口径8.1cm　底径6.0cm　器高1.85cm　右回転ロクロ　底面糸切り、板状圧痕あり　内底部ナデ　胎土は橙色、多量の砂粒・白色粒子・赤色粒子・海綿骨芯を含む砂質土
41	溝2上層	土師器皿R種小型	口径(8.2)cm　底径(6.0)cm　器高2.6cm　回転ロクロ　底面糸切り、板状圧痕あり　内底部ナデ　胎土は淡橙色、砂粒・赤色粒子・海綿骨芯を含む弱砂質土　口縁部に油煤付着
42	溝2上層	瓦器火鉢	口縁部片　輪積み成形　　胎土は淡灰褐色～灰橙色、白色粒・赤色粒・多量の微砂粒を含む砂質土

出土遺物観察表（2）

挿図番号	出土遺構・層位	種別	備考
43	溝2上層	瓦器火鉢	口縁部片　輪積み成形　　胎土は暗灰色、多量の白色粒・海綿骨芯・砂粒・気孔を含む砂質土
44	溝2上層	常滑片口鉢Ⅰ類	口縁部片　胎土は灰色、白色粒・黒色粒・砂粒・気孔含む
45	溝2上層	常滑片口鉢Ⅱ類	口縁部片　輪積み成形　　胎土は灰色、多量の大きめの石英粒・砂粒・気孔を含む緻密土　器表は茶色
46	溝2上層	渥美　甕	口縁部片　輪積み成形　　胎土は灰色、長石粒・気孔を僅かに含む緻密土　表面に叩き目残る
47	溝2上層	常滑　甕	口縁部片　輪積み成形　　胎土は黄灰褐色、長石粒・礫含む
48	溝2上層	磨耗陶片	縦4.0cm　横3.5cm　厚さ1.4cm　美甕胴部使用　叩き目あり　胎土は灰色、長石粒僅かに含む緻密土　一断面が使用によりやや磨耗
49	溝2上層	磨耗陶片	縦6.1cm　横4.1cm　厚さ1.5㎝　常滑片口鉢Ⅱ類の底部に近い胴部使用　胎土は灰色から灰桃色、大小長石粒多く含む　断面の一辺と一角が使用により磨耗
50	溝2上層	磨耗陶片	縦7.9cm　横6.0cm　厚さ2.4センチ　常滑甕の底部～胴部使用　胎土は灰色、大小長石粒・石英粒・黒色粒多く含む　断面の二辺の一部が使用によりやや磨耗
51	溝2上層	白磁　口はげ皿	口縁部片　ロクロ成形　　胎土は淡灰色、微砂粒を含み緻密　釉は青色を帯びた灰色、半透明で気孔あり
52	溝2上層	竜泉窯青磁折縁鉢	口縁部片　素地は灰白色、微砂粒含む　釉は緑掛かった水色、不透明で厚く掛かる　大き目の貫入あり
53	溝2上層	竜泉窯青磁鎬蓮弁文碗	口縁部片　口径(17.8)cm　素地は灰色、キメ細かい　釉は水色、不透明　大き目の貫入あり
54	溝2上層	竜泉窯青磁鎬蓮弁文碗	口縁部片　素地は灰白色、微砂粒含む　釉は青緑色、半透明、気泡含む
55	溝2上層	祥符元寶	初鋳1008年　北宋　楷書
56	溝2上層	砥石　中砥	残存長(10.0)cm　幅3.0cm　厚2.0cm　淡緑灰色　砥面4面
57	溝2上層	使用痕のある石	長14.0cm　幅9・6cm　厚5.0cm　淡緑灰色　砥面4面
図6－1	溝2下層	土師器皿R種小型	口径(7.05)cm　底径(4.8)cm　器高1.85cm　右回転ロクロ　底面糸切り、薄く板状圧痕あり　内底部ナデ　胎土は淡橙色、砂粒・赤色粒子・海綿骨芯・泥岩粒を含む弱砂質土
2	溝2下層	土師器皿R種小型	口径(7.5)cm　底径(5.0)cm　器高1.7cm　回転ロクロ　底面糸切り、板状圧痕あり　内底部ナデ　胎土は淡赤橙色、砂粒・赤色粒子・海綿骨芯・白色粒を含む砂質土
3	溝2下層	土師器皿R種小型	口径(8.9)cm　底径(7.1)cm　器高1.65cm　右回転ロクロ　底面糸切り、板状圧痕あり　内底部ナデ　胎土は浅黄橙色、微砂粒・白色粒子・海綿骨芯を含む
4	溝2下層	鍔鍋	胴部片　胎土は灰色、白色粒・金雲母・多量の砂粒を含む砂質土　器表は淡黄灰色
5	溝2下層	南部軽　山茶碗	口縁部片　胎土は明灰色、砂粒・白色粒含む
6	溝2下層	常滑片口鉢Ⅰ類	口縁部片　胎土は淡灰色、大小白色粒含む　器表は茶色
7	溝2下層	常滑片口鉢Ⅰ類	口縁部片　胎土は明灰色、砂粒・長石粒・石英粒・黒色粒・気孔含む砂質土
8	溝2下層	常滑片口鉢Ⅰ類	口縁部片　胎土は明灰色、砂粒・長石粒・石英粒・黒色粒含む砂質土
9	溝2下層	常滑片口鉢Ⅰ類	口縁部片　胎土は灰褐色、砂粒・長石粒含む
10	溝2下層	常滑片口鉢Ⅰ類	底部片　胎土は灰色、大小の長石粒・石英粒・砂粒を多く含み、黒灰色の大きい粒混じる　内面使用により磨耗
11	溝2下層	常滑片口鉢Ⅰ類	口縁部片　胎土は灰褐色、砂粒・長石粒含む
12	溝2下層	常滑片口鉢Ⅱ類	口縁部片　胎土は暗灰色、砂粒・白色粒・気孔含み緻密　器表は紫褐色
13	溝2下層	常滑片口鉢Ⅱ類	口縁部片　胎土は灰橙色、砂粒・長石粒・石英粒多く含み、気孔・灰黒色粒混じる　器表は茶色
14	溝2下層	常滑片口鉢Ⅱ類	口縁～底部片　器高8.9cm　胎土は橙褐色、石英粒・多量の砂粒・赤色粒・灰黒色粒を含む砂質土　器表は橙～茶色
15	溝2下層	渥美　甕	口縁部片　胎土は灰色、白色粒少し含む緻密土
16	溝2下層	常滑　壺	底部片　胎土は淡灰色、白色微粒・灰黒色粒・気孔少し含む緻密土　器表は茶色
17	溝2下層	常滑　甕	口縁部片　胎土は明灰褐色、赤色粒・白色粒・黒色粒少し含む　器表は茶～灰茶色
18	溝2下層	常滑　甕	口縁部片　胎土は灰色、長石粒・石英粒・多量の黒色粒含み、気孔混じる　器表は茶～灰茶色
19	溝2下層	常滑　甕	口縁部～頸部片　胎土は橙色の混じる灰色、長石粒・石英粒・砂粒含み、気孔混じる　器表は茶色
20	溝2下層	常滑　甕	口縁部片　胎土は暗灰色、長石粒・石英粒・砂粒含み、大き目の気孔混じる　器表は茶～暗灰色
21	溝2下層	磨耗陶片	常滑片口鉢Ⅱ類口縁部使用　縦4.5cm　横8.9cm　厚み0.9cm　胎土は灰色、砂粒・黒色粒・白色粒含む　口縁部とその両側が丸く磨耗し蒲鉾型をなす
22	溝2下層	磨耗陶片	常滑甕胴部使用　縦5.1cm　横7.8cm　厚み1.1cm　胎土は灰色、大小の長石・石英粒含む　断面の2辺が丸く磨耗する
23	溝2下層	磨耗陶片	常滑甕胴部使用　縦5.1cm　横6.5cm　厚1.1cm　胎土は灰色、大小の長石・石英粒・黒色粒含む　断面の全体が激しく磨耗し丸みを帯びる　平面の片面も使用のため磨耗している
24	溝2下層	磨耗陶片	常滑片口鉢Ⅱ類底部使用　縦5.4cm　横3.8cm　厚み1.1cm　胎土は灰色～灰橙色、白色粒・黒色粒・砂粒を含む　断面の一辺とその両端の角が磨耗、胴部外側が激しく磨耗し滑らかな面を呈す
25	溝2下層	瀬戸　仏華	口縁部片　口径2.7cm　ロクロ成形　胎土はやや橙色を帯びた淡灰色　灰釉
26	溝2下層	瀬戸　鉢	口縁部～胴部片　口径(18.4)cm　ロクロ成形　胎土は灰色　灰釉ハケ塗り　口縁はやや角の残った玉縁状　口縁の少し下に4条の沈線が巡る　胴部下位ヘラ削り
27	溝2下層	平瓦	遺存長(8.2)cm　遺存幅(6.1)cm　厚2.2cm　胎土は淡灰桃色、赤色粒・砂粒・鉱物粒を含む　凸面は縄目　凹面は布目
28	溝2下層	平瓦	遺存長(5.6)cm　遺存幅(9.5)cm　厚2.0cm　胎土は灰色～灰橙色、白色粒を含む　凸面は縄目　凹面は縄目転写　永福寺Ⅰ期
29	溝2下層	白磁　合子	身部分　口径(6.2)cm　胴部最大径(6.9)cm　ロクロ成形　素地は黄味を帯びた白色　釉薬は微かに青灰色を帯びた透明釉、細かい貫入あり
30	溝2下層	青磁　酒会	蓋の縁部分片　素地は淡橙色で堅緻　釉は水色、半透明で厚く掛かる　貫入多く入る
31	溝2下層	竜泉窯青磁鎬蓮弁文碗	底部片　底径(3.8)cm　素地は灰白色、黒色微粒子含む　釉は淡緑灰色、半透明　大き目の貫入あり　畳付きのみ露胎

出土遺物観察表（3）

挿図番号	出土遺構・層位	種別	備考
32	溝2下層	竜泉窯青磁鎬蓮弁文碗	底部片　底径(5.0)cm　素地は淡灰色、黒色微粒子含む　釉は水色、半透明　　畳付きのみ露胎
33	溝2下層	砥石　仕上	遺存長(5.2)cm　幅3.6cm　厚0.7cm　淡灰桃色　砥面2面
34	溝2下層	砥石　中砥	遺存長(7.0)cm　幅2.1cm　厚1.9cm　淡黄灰色　砥面2面
35	溝2下層	砥石　中砥	遺存長(6.2)cm　幅3.8cm　厚3.4cm　淡灰桃色　砥面4面　深い線状の傷多数
36	溝2最下層	磨耗陶片	渥美甕胴部使用　縦8.1cm　横4.5cm　厚1.0cm　胎土は暗灰色、肌理細かく、長石粒含む　叩き目（格子）あり　断面の一辺がやや磨耗
37	溝2最下層	竜泉窯青磁画花文碗	口縁部片　素地は灰色、堅緻　　釉は淡青灰色、半透明、気泡含む　内側に画花文
38	溝2中央確認坑	土師器皿R種小型	口径(7.6)cm　底径(6.0)cm　器高2.0cm　回転ロクロ　底面糸切り、板状圧痕あり　内底部ナデ　胎土は橙色、砂粒・赤色粒子・海綿骨芯を含む弱砂質土
39	溝2中央確認坑	常滑片口鉢Ⅰ類	口縁部片　胎土は灰色、砂粒・白色粒を含む砂質土
40	溝2西壁際確認坑	瓦器火鉢	底部片　輪積み成形　　胎土は灰褐色、白色粒・赤色粒・海綿骨芯・砂粒を含む砂質土　胴部下位はハケ目状工具及び横ナデ
41	溝2西壁際確認坑	常滑片口鉢Ⅰ類	口縁部片　胎土は淡灰色、砂粒・白色粒・黒色粒を含む砂質土
42	溝2西壁際確認坑	磨耗陶片	常滑片口鉢Ⅱ類底部使用　縦5.3cm　横2.9cm　厚み1.5cm　胎土は灰色、白色粒・黒色粒・気孔を含む　断面の一辺が磨耗
43	溝2西壁際確認坑	磨耗陶片	神出甕胴部片使用　縦3.4cm　横2.4cm　厚さ0.6cm　胎土は黒灰色、堅緻、白色微粒子含む　外側は格子叩き目　断面の1辺やや磨耗
44	溝2西壁際確認坑	砥石　仕上砥	遺存長(3.9)cm　幅4.1cm　厚0.8cm　淡灰色　砥面1面
図7－1	竪穴1	土師器皿R種大型	口径(13.2)cm　底径(8.7)cm　器高3.5cm　右回転ロクロ　底面糸切り、　内底部ナデ　胎土は淡橙色、砂粒・赤色粒子・白色粒子を含む弱砂質土
2	竪穴1	土師器皿T種大型	口径(15.4)cm　器高(12.9)cm　手捏ね後口縁部内底部ナデ　胎土は淡褐色、少量の白色粒子・微砂粒を含むやや精良土
3	竪穴1	連歯下駄	長21.8cm　幅10.3cm　厚1.5cm　遺存高(1.7)cm　前後とも歯の部分は磨り減っている
4	土坑1	土師器皿T種小型	口径(10.2)cm　器高1.7cm　手捏ね後口縁部内底部ナデ　胎土は淡橙色、赤色粒子・海綿骨芯を僅かに含む精良土
5	土坑1	土師器皿T種大型	口径(12.0)cm　器高(2.55)cm　手捏ね後口縁部内底部ナデ　胎土は淡褐色、赤色粒子・白色粒子・微砂粒を含む弱砂質土
6	土坑1	土師器皿R種小型	口径(7.9)cm　底径(4.9)cm　器高2.3cm　右回転ロクロ　底面糸切り、板状圧痕あり　内底部ナデ　胎土は淡橙色、微砂粒・赤色粒子・海綿骨芯・白色粒子を含む弱砂質土
7	土坑1	土師器皿R種小型	口径(9.0)cm　底径(7.9)cm　器高1.35cm　回転ロクロ　底面糸切り　胎土は淡橙色、微砂粒・赤色粒子を含む弱砂質土
8	土坑1	常滑片口鉢Ⅰ類	口縁部片　胎土は灰色、白色粒を少し含む
9	土坑1	常滑片口鉢Ⅰ類	口縁部片　胎土は灰色、長石粒・石英粒・黒色粒・気孔を含む　降灰あり
10	土坑1	常滑片口鉢Ⅱ類	口縁部片　胎土は灰橙色、白色粒・砂粒を含む　器表は茶色　内側に降灰あり
11	土坑1	常滑　壺	口縁部片　胎土は暗褐色、白色粒・砂粒・黒色粒を含みやや粗い　器表は茶色　内側に降灰あり
12	土坑1	常滑　甕	口縁部片　胎土は灰色、石英粒・砂粒・黒色粒を含む　器表は茶色　外側は緑灰色の自然釉が厚く掛かる
13	土坑1	磨耗陶片	常滑片口鉢Ⅰ類底部使用　縦7.4cm　横6.9cm　厚み1.6cm　胎土は灰色～灰橙色、石英粒・大き目の礫・砂粒を含む　断面の一部が磨耗
14	土坑1	青白磁　梅	胴部片　素地は灰白色、黒色微粒子含む　釉は水色、半透明　線刻(植物文か)
15	土坑1	竜泉窯青磁稜花碗	口縁部片　素地は灰色、堅緻　　釉は淡青灰色、透明、貫入あり
図8－1	Ⅰ面包含層	土師器皿R種小型	口径(8.2)cm　底径(5.9)cm　器高1.9cm　右回転ロクロ　底面糸切り、板状圧痕あり　内底部ナデ　胎土は浅黄橙色、多量の砂粒・赤色粒子・白色粒を含む砂質土
2	Ⅰ面包含層	土師器皿R種小型	口径(8.4)cm　底径(6.6)cm　器高2.35cm　回転ロクロ　底面糸切り　内底部ナデ　胎土は浅黄橙色、砂粒・赤色粒子・海綿骨芯・泥岩粒を含む弱砂質土
3	Ⅰ面包含層	土師器皿R種小型	口径(8.2)cm　底径(6.7)cm　器高1.4cm　右回転ロクロ　底面糸切り、板状圧痕あり　内底部ナデ　胎土は橙色、砂粒・赤色粒子・海綿骨芯を含む砂質土
4	Ⅰ面包含層	土師器皿R種小型	口径(8.6)cm　底径(6.4)cm　器高1.6cm　回転ロクロ　底面糸切り、　内底部ナデ　胎土は橙色、砂粒・赤色粒子・海綿骨芯を含む弱砂質土　口縁部は内外とも1cm前後の幅で油煤付着
5	Ⅰ面包含層	瓦器火鉢	口縁部片　輪積み成形　胎土は淡橙色、白色粒・赤色粒・砂粒を含む砂質土　胎芯は灰色
6	Ⅰ面包含層	南部系　山茶碗	口径(15.7)cm　ロクロ成形　胎土は暗灰色、白色粒を含む
7	Ⅰ面包含層	常滑片口鉢Ⅰ類	口縁部片　胎土は灰色、砂粒・白色粒・黒色粒を含む
8	Ⅰ面包含層	常滑片口鉢Ⅰ類	口縁部片　胎土は灰色、砂粒・白色粒を含む
9	Ⅰ面包含層	常滑片口鉢Ⅰ類	口縁部片　胎土は灰色、砂粒・白色粒・大きな石英粒を含む
10	Ⅰ面包含層	常滑片口鉢Ⅱ類	口縁部片　胎土は淡赤灰色、白色粒・石英粒・礫を含む
11	Ⅰ面包含層	常滑片口鉢Ⅱ類	口縁部片　胎土は灰褐色、白色粒・黒色粒を含む　内側に厚めに自然釉掛かる
12	Ⅰ面包含層	常滑片口鉢Ⅱ類	口縁部片　胎土は淡橙褐色、白色粒・砂粒を含む　器表は茶色　内側に降灰
13	Ⅰ面包含層	常滑片口鉢Ⅰ類	口縁部片　胎土は明灰色、白色粒・砂粒を含む　口縁から内側にかけて自然釉
14	Ⅰ面包含層	常滑片口鉢Ⅱ類	口縁部片　胎土は灰橙色、白色粒・砂粒・長石・石英粒を含む

出土遺物観察表（4）

挿図番号	出土遺構・層位	種別	備考
15	Ⅰ面包含層	常滑片口鉢Ⅱ類	口縁部片　胎土は灰橙色、白色粒・礫・砂粒を含む　内側に降灰
16	Ⅰ面包含層	渥美　甕	口縁部片　胎土は灰色、白色粒・礫を含む　内側に降灰
17	Ⅰ面包含層	常滑　壺	口縁から頸部片　口径(11.4)cm　輪積み成形　胎土は灰色、白色粒・砂粒を含む
18	Ⅰ面包含層	常滑　壺	口縁から頸部片　口径(17.1)cm　輪積み成形　胎土は灰色～灰橙色、白色粒・橙色粒を含む　器表は褐色
19	Ⅰ面包含層	常滑　甕	口縁部片　輪積み成形　胎土は灰色、白色粒少しを含む　器表は緑灰色から暗褐色
20	Ⅰ面包含層	常滑　甕	口縁部片　輪積み成形　胎土は灰色、6mm前後の丸い黄白色ブロックを含む　器表は灰褐色
21	Ⅰ面包含層	磨耗陶片	縦8.3cm　横7.2cm　厚さ1.3cm　信楽甕胴部片使用　胎土は淡黄褐色で堅緻、白色粒・暗灰色粒少し含む　叩き目(格子)あり　断面の一辺と一角が使用により磨耗
22	Ⅰ面包含層	磨耗陶片	縦9.3cm　横5.3cm　厚さ1.1cm　常滑甕胴部片使用　胎土は灰色、白色粒含む　叩き目(の中に斜め格子)あり　断面の2箇所の角が使用により磨耗
23	Ⅰ面包含層	磨耗陶片	縦14.8cm　横6.4cm　厚さ1.1cm　常滑甕胴部片使用　胎土は暗灰色、白色粒含む　叩き目(格子)あり　断面の1辺が使用により磨耗
24	Ⅰ面包含層	瀬戸　仏華	胴部片　胴部最大径4.1cm　残存器高(4.4)cm　胎土は灰色～淡灰橙色、緻密　外側は褐色釉が厚めに掛
25	Ⅰ面包含層	砥石　中砥	残存長(3.7)cm　幅1.7cm　厚1.45cm　淡緑灰色　砥面4面
26	Ⅰ面包含層	砥石　仕上	残存長(3.6)cm　幅3.3cm　厚1.1cm　明灰色　砥面1面　切り出し痕あり
27	Ⅰ面包含層	砥石　中砥	残存長(12.0)cm　残存幅(5.3)cm　厚4.9cm　灰桃色　砥面3面　天草産
28	Ⅰ面	土師器皿T種大型	口径13.4cm　器高3.8cm　手ヅクね後口縁部内底部ナデ　胎土は淡褐色、赤色粒子・白色粒子・微砂粒・海綿骨芯を含む弱砂質土
29	Ⅰ面	土師器皿R種小型	口径7.4cm　底径6.7cm　器高1.8cm　回転ロクロ　底面糸切り、板状圧痕微かにあり　内底部ナデ　胎土は淡橙色、砂粒・赤色粒子・海綿骨芯・礫を含む砂質土
30	Ⅰ面	土師器皿R種小型	口径(8.0)cm　底径(6.7)cm　器高1.55cm　右回転ロクロ　底面糸切り、内底部ナデ　胎土は赤橙色、砂粒・赤色粒子・海綿骨芯を含む砂質土
31	Ⅰ面	土師器皿T種小型	口径8.0cm　器高1.7cm　手ヅクね後口縁部内底部ナデ　胎土は赤橙色、赤色粒子・白色粒子・砂粒・泥岩粒を含む砂質土
32	Ⅰ面	土師器皿R種小型	口径7.7cm　底径6.1cm　器高1.85cm　回転ロクロ　底面糸切り、内底部ナデ　胎土は淡褐色、砂粒・赤色粒子・海綿骨芯を含む砂質土
33	Ⅰ面	土師器皿R種小型	口径7.6cm　底径5.3cm　器高1.7cm　右回転ロクロ　底面糸切り、板状圧痕あり　内底部ナデ　胎土は淡橙色、砂粒・赤色粒子・海綿骨芯を含む弱砂質土
34	Ⅰ面	土師器皿R種大型	口径(12.6)cm　底径(9.5)cm　器高3.5cm　回転ロクロ　底面糸切り、内底部ナデ　胎土は淡橙色、砂粒・赤色粒子・白色粒子含む砂質土
35	Ⅰ面	土師器皿R種大型	口径(11.9)cm　底径(7.3)cm　器高3.15cm　右回転ロクロ　底面糸切り　板状圧痕あり、内底部ナデ　胎土は淡黄褐色、砂粒・赤色粒子・白色粒・海綿骨芯を含む砂質土
36	Ⅰ面	土師器皿R種大型	口径(12.4)cm　底径(9.5)cm　器高2.75cm　右回転ロクロ　底面糸切り、 内底部ナデ　胎土は赤橙色、砂粒・赤色粒子・海綿骨芯・白色粒子を含む弱砂質土
37	Ⅰ面	白色系土師器皿	口縁部片　手捏ね後口縁部ナデ　胎土は乳白色精良土
38	Ⅰ面	瀬戸内系土師器碗	底部片　底径(5.1)cm　手捏ね成形後高台部貼り付け　胎土は黄灰白色　胎芯は灰黒色
39	Ⅰ面	瓦器　碗	口縁～体部片　口径(10.4)cm　手捏ね成形後口縁部ナデ　内側側壁横位の暗文　胎土は灰白色　器表は灰黒色
40	Ⅰ面	常滑片口鉢Ⅰ類	口縁部片　胎土は灰色、砂粒・白色粒・灰黒色粒を含む
41	Ⅰ面	常滑片口鉢Ⅰ類	口径(13.25)cm　底径(7.6)cm　器高3.25cm　右回転ロクロ　底面糸切り　内底部ナデ　胎土は淡橙色、赤色粒子・砂粒を含む砂質土
42	Ⅰ面	常滑片口鉢Ⅱ類	口縁～体部片　胎土は灰色、緻密、白色粒・礫含む　器表は淡灰褐色
43	Ⅰ面	常滑片口鉢Ⅰ類	口縁～体部片　口径(32.4)cm　胎土は灰色、白色粒・大き目の石英粒含む
44	Ⅰ面	渥美　甕	口縁部片　胎土は明灰茶色、緻密、気孔含む
45	Ⅰ面	磨耗陶片	縦6.5cm　横10.5cm　厚さ1.3cm　渥美甕胴部片使用　胎土は暗灰色、白色粒・灰黒色粒含む　叩き目(格子)あり　断面の1角が使用により磨耗
46	Ⅰ面	磨耗陶片	縦8.0cm　横12.8cm　厚さ1.0cm　常滑甕胴部片使用　胎土は灰褐色、白色粒・黒色粒・砂粒含む　器表は茶色　口縁部外側が丸く磨耗
47	Ⅰ面	常滑　甕	胴部片　胎土は灰色、白色粒・灰黒色粒・石英粒・大きい礫を含む　器表は茶色　叩き目(格子)あり
48	Ⅰ面	常滑　甕	胴部片　胎土は灰色、白色粒を含む　器表は褐色　叩き目(格子)あり
49	Ⅰ面	青白磁　香炉	口縁部片　口径(6.7)cm　ロクロ成形　素地は黒色微粒子を含む白色土で堅緻　釉薬は水色透明釉　植物文かと思われる貼り付け文が施され、その一部は露胎である
50	Ⅰ面	不明金属製品	長5.0cm　幅1.5cm　厚0.6cm　重量8g　鉄製　三日月型を呈す
51	Ⅰ面	不明金属製品	長(4.9)cm　幅1.7cm　厚0.6cm　重量18g　銅製　三日月型を呈す
52	Ⅰ面	鉄釘	長4.8cm　幅0.6cm　厚0.8cm　重量4g
53	Ⅰ面	鉄釘	長4.4cm　幅0.8cm　厚0.6cm　重量3g
54	Ⅰ面	鉄釘	残存長(9.6)cm　幅0.6cm　厚0.4cm　重量9g
55	Ⅰ面	鉄釘	残存長(9.8)cm　幅0.4cm　厚0.55cm　重量9g
56	Ⅰ面	鉄釘	残存長(8.0)cm　幅0.6cm　厚0.5cm　重量9g
図9－1	北側東壁際最終深掘	常滑　甕	口縁部片　輪積み成形　胎土は淡灰褐色、黒色粒・石英粒・砂粒含む　器表は明茶色
2	北側東壁際最終深堀	磨耗陶片	縦4.4cm　横3.0cm　厚さ1.2cm　常滑甕口縁部片使用　胎土は暗灰色、白色粒・灰黒色粒含む　叩き目(格子)あり　表面は緑灰色の自然釉厚めにかかる　断面の2辺が使用により磨耗
3	南側東壁際最終深掘	土師器皿R種大型	口径(13.0)cm　底径(8.8)cm　器高3.0cm　回転ロクロ　底面糸切り、板状圧痕あり　内底部ナデ　胎土は橙色、砂粒・赤色粒子・海綿骨芯を含む弱砂質土
4	南側東壁際最終深掘	常滑片口鉢Ⅱ類	口縁部片　胎土は黄灰色、白色粒・礫を含む
5	南側東壁際最終深掘	磨耗陶片	縦7.0cm　横4.8cm　厚さ0.85cm　常滑甕口縁部片使用　胎土は暗灰色、白色粒・灰黒色粒含む　器表は茶色　口縁部外側が使用により磨耗

出土遺物観察表（5）

挿図番号	出土遺構・層位	種別	備考
6	南側東壁際最終深掘	平瓦	遺存長(9.6)cm　遺存幅(7.0)cm　厚2.0cm　胎土は灰色、白色粒・砂粒・気孔を含む　凸面は縄目　凹面は布目後横ナデ　永福寺Ⅰ期
7	南側東壁際最終深掘	東遠系山皿	口径(7.6)cm　底径(4.6)cm　器高1.7cm　ロクロ成形　　胎土は暗灰色、微砂質で堅い　内側に自然釉がかかる
8	南側東壁際最終深掘	竜泉窯青磁碗	底部片　底径4.4cm　素地は明灰褐色、黒灰色の大小の粒含み、堅緻　釉は淡緑灰色、透明　削り出し高台、畳付きの部分は使用のため平坦・滑らかに磨耗　内底面には使用痕(傷)あり
9	南側東壁際最終深掘	竜泉窯青磁櫛描蓮弁文碗	口縁部片　口径(15.6)cm　素地は灰白色、黒色微粒子含みきめ細かい　釉は水色、半透明、大き目の貫入あり　内側は二次的に被熱し黒っぽくザラつく
10	南側南壁際最終深掘	土師器皿T種小型	口径(9.1)cm　手捏ね後口縁部内底部ナデ　胎土は淡橙色、赤色粒子・白色粒子・砂粒・海綿骨芯を含む砂質土
11	南側南壁際最終深掘	磨耗陶片	縦6.3cm　横5.7cm　厚さ1.7cm　常滑甕底部片使用　胎土は灰色、白色粒・灰黒色粒含む　器表は明茶色　断面の一辺が使用により磨耗
12	中世以前	須恵器　甕	胴部片　胎土は明灰色、白色粒・灰黒色粒少し含み堅緻　縦5.1cm　横6.8cm　厚さ1.2cm　2辺が使用により磨耗
13	中世以前	壺型土器	底部片　胎土は暗橙色、雲母・長石・角閃石・海綿骨芯含みやや粗い　内側はハケ目工具痕　外側は縦方向削り後磨き　弥生後期から古墳前期
14	中世以前	壺型土器	底部片　底径(10.0)cm　胎土は淡灰橙色、雲母・砂粒・海綿骨芯含みやや粗い　内側はナデ　外側はヘラ削り
15	中世以前	壺型土器	底部片　底径(7.7)cm　胎土は灰桃色、雲母・砂粒・赤色粒・石英粒含みやや粗い　内側はナデ　外側はヘラ削り
16	中世以前	壺型土器	底部片　底径(7.0)cm　胎土は灰橙色、雲母・角閃石・長石粒・赤色粒・砂粒含み、粗い　外底部木葉痕　外側面はヘラ削り　内底面に不規則な傷
17	遺構外	土師器皿T種小型	口径(8.3)cm　器高(1.5)cm　手捏ね後口縁部内底部ナデ　胎土は赤橙色、赤色粒子・白色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む砂質土
18	遺構外	土師器皿R種小型	口径7.4cm　底径4.9cm　器高1.9cm　右回転ロクロ　底面糸切り、板状圧痕あり　内底部ナデ　胎土は淡褐色、砂粒・白色粒子・海綿骨芯を含む砂質土
19	遺構外	瓦器火鉢	脚部片　幅3.0cm　厚さ2.4cm　残存高(3.7)cm　胎土は灰桃色、白色粒・赤色粒・砂粒を含む
20	遺構外	土製品	直径1.8cm　厚さ0.75cm　胎土は橙色
21	遺構外	常滑片口鉢Ⅱ類	口縁部片　輪積み成形　胎土は暗灰橙色、長石・石英粒・砂粒・礫含む　器表は茶褐色
22	遺構外	常滑　甕	口縁部片　輪積み成形　胎土は暗灰色、長石・石英粒・砂粒・気孔含む
23	遺構外	瀬戸　四耳	口縁部片　口径(9.0)cm　胎土は明灰色、堅く締まった精良土　釉はハケ塗りで緑灰色を呈す

第四章　まとめ

1．遺構の変遷

あらためて本地点の変遷について、整理しておきたい。

古墳時代後期～律令時代

この時代の遺物は少なからず出土しており、一帯に当時かなり盛んな人の営為があったことを示す。調査地点北側を通る県道鎌倉葉山線か、あるいはその約 80m南を通過する道のいずれかが律令時代前期の古東海道であった可能性が高く、そのことを反映しているのであろう。当地点から直線距離で南にわずか 200mに位置する地点 53（材木座町屋遺跡　材木座一丁目 910 番地点，森ほか 2001）でも、律令時代の掘立柱建物群が検出されている。本地点において遺構に関しては、掘削深度に規制があることもあって、確認していない。しかし、第三章第 1 節で触れたように、調査区北側 3 分の 2 ほどは基盤層がなく、北に向かって急傾斜で落ちていくことが溝 2 壁面などで確認された。これが何であるかは確かめられなかったが、層位的には古代であり、位置的からみても古街道の南辺にかかっていてもおかしくはない。これについては、今少し事例の増えるのを待ちたい。

平安時代後期

この時代の資料は、遺構・遺物とも今回得られなかった。

鎌倉時代

13 世紀前半、おそらく第 1 四半期以前に、この地にいくつか丸い穴が掘られる（下層遺構群「土坑 1」・「P. 13」）。穴がどういう性格のものかは不明である。しかし、遺構群の中で穴が早くに掘られるという状況は、筆者がかつて調査した地点 41（米町遺跡　大町二丁目 2315 番ほか地点，馬淵 1995）に共通の現象といえる。そこではそれは便槽と推定される状況にあった。本地点がそうであるかどうかはわからないが、鎌倉時代前期から中期にかけて、この一帯で何かしらの人的営為が始まったことは間違いない。

出土遺物のうち、中国陶磁や渥美や常滑などに鎌倉初期までさかのぼる様相を持つものが少なからず含まれているので（図 5－20・28・30・46，図 6－18，図 8－16・44 など）、実際にはその頃から人の往来があったとみていい。なお、『吾妻鏡』建暦三年（1213）五月二日条の和田合戦の記事に、「米町辻大町大路等之切処合戦」とあり、「米町辻」とはここから至近の「大町四ツ角」のことであろうから、戦いの場はおそらく当地点にも及んだであろう。

13 世紀第 2 四半期頃からこの付近の様相は変わり、木組みの側溝を持つ道路が南北に通じる。道路は若宮大路に対し、17 度ほど西にずれている。北はすぐに東西の大路（「大町大路」か）に接続すると考えられるが、南方にどう行くのかはわからない。道路の両脇がどういう性格のものか、調査区内で溝しか出ておらず、遺構からは不明である。しかしこの点については、出土遺物の面から次項で若干の考察を加える。

2．出土遺物の傾向について

第三章末尾で触れたように、本地点では他の地域に比して鋳造関係の遺物が多い。この点に簡単に触れておきたい。層位・遺構を問わず全体に出土しているが、溝 2 下層にとりわけ多い。ここか

らは鉱滓のほかに鉄皿の可能性のある金属塊・薄い棒状の鉄片・板状の鉄片複数も出土している。溝 2 は道路側溝である。このことは、道路がここに出現して以降、金属の職人がこの付近で活動していたことを示すものに他ならない。場の性格の一端を示す材料として記憶しておきたい。

注目すべきは、摩耗した陶片（「摩耗陶片」）の多いことで、この点は近在の調査でも確認できる傾向である。磨耗陶片が何に使われたかはいろいろ議論があり（馬淵 1993 など）、また場所による偏在性の精査もおこなわれていないが、これもまた場の性格を考える上で示唆となろう。

3．県道鎌倉葉山線について

調査地点のすぐ北を通るこの道が、かつての大町大路であったかどうかについては議論がある（高柳 1959・田代 1998・馬淵ほか 2007 第一章など）。しかし、ともかくもこれが遅くとも鎌倉時代には、鎌倉南域を東西に横断する道路として存在していたことは考古学・文献史料を問わず様々な事例により明らかである。当時の「大路」であったことは間違いない。この道路の幅について今回の調査で、間接的ながらもいくばくか示唆が得られたので、整理しておきたい。

調査区北端から現況の歩道までは 1.5m、道路まで 3m余りに過ぎない。しかし、調査区内に大路の存在を窺わせるような要素はない。すなわち、道路ばかりか、東西に走行する溝のようなものも見つかっていない。この規模の道路に側溝の伴わないことは考えられないので、このことは東西の大路がもっと北側か、あるいは逆に南側を通っていることを意味している。

本地点から 200mあまり東の米町遺跡（地点 44・45－大町二丁目 2312 番 10・同 4 地点）で、近年、鎌倉時代後期～末期の泥岩版築遺構が発見された（斎木ほか 2000）。調査者はこれを道路遺構として、「「車大路」あるいは「古い東海道」である」と結論づけている（斎木ほか 2000，20 頁）。またその続きと思われる版築面が東隣の調査でも見つかっており（地点 47－大町二丁目 2320 番 1 地点，斎木ほか 2005）、同じ調査者は、それを「大町大路」と推測した上で、「東海道」であろうと発表した（2001 年 6 月 2 日『朝日新聞』朝刊「湘南版」・同年 6 月 27 日『毎日新聞』朝刊）。この点について、以前に表明した疑問（馬淵ほか 2002）をあらためて述べておきたい。

鎌倉時代の道路が発見されただけで、それより 500 年も前の古東海道が発見されたことになる理由は不明だが、何よりこれを「大町大路」とする前提自体が確実とはいいがたいのではないか。というのも、「善宝寺寺地図」に描かれた若宮大路下馬四ツ角の位置からみて、現在の県道は中世期にここを通っていた道からあまり動いていないように見えるし、先述のとおり、現況の県道歩道から 1.5mの位置にある本地点の調査でも、古街路の側溝は発見されていない。ところが、地点 47 等で検出された版築面の南辺および側溝とおぼしい溝は、現在の県道鎌倉葉山線から 26mほども（報告書地図上で馬淵概則）南にある。したがってそれらが「大町大路」であるとすると、本地点にいたるまでのどこかで北に曲がって現在の道に接続しなければならない。そうでなければ、地点 47 付近においては最低でも 30mを超える幅員を有していることになる。若宮大路が 33mであることからみて、それは考えにくいのではないか。ちなみに、若宮大路に次ぐ規格の街路でいえば、現在までに判明している横大路・二階堂大路・小町大路で、幅が約 20m強である（馬淵 2003・同 2008・馬淵ほか 2010）。いずれにしても、県道葉山鎌倉線が何であったか、という点とともに、一帯で何カ所か検出されている版築面についても、再検討の要があろう。

（馬淵）

引用・参考文献（本書全体に共通）

赤星直忠 1959　「鎌倉市史　考古編」吉川弘文館

石井進ほか 1984　「神奈川県の地名」『日本歴史地名大系 14』平凡社

大上周三 2009　「神奈川郡衙と官衙関連遺跡について」『神奈川考古』第 45 号　神奈川考古同人会

菊川英政 1997　「古代鎌倉の様相」『考古論叢　神奈川』第六集　神奈川県考古学会

斎木秀雄ほか 2005　『米町遺跡発掘調査報告書―第 10 地点―』有限会社　鎌倉遺跡調査会

斎木秀雄ほか 2000　『米町遺跡―第 6 地点、第 7 地点発掘調査報告書―』鎌倉市米町遺跡発掘調査団

高柳光寿 1959　『鎌倉市史　総説編』吉川弘文館

竹内理三ほか 1981　『神奈川県史　通史編』神奈川県史編集室

田代郁夫 1998　「大町大路と小町大路―中世都市の中の「町」と「路」―」『湘南考古学同好会々報』73　湘南考古学同好会

藤木久志 1993　「中世鎌倉の祇園会と民衆」『神奈川地域史研究』神奈川地域史研究会

松尾剛次 1993　『中世都市鎌倉の風景』吉川弘文館

馬淵和雄 1993　「すり鉢のあいかた―すりこぎに替わるもの―」『青山考古』第 11 号　青山考古学会

馬淵和雄 1994　「武士の都　鎌倉」『中世の風景を読む 2　都市鎌倉と坂東の海に暮らす』新人物往来社

馬淵和雄 1995　「米町遺跡（№131）大町二丁目 2315 番ほか地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』11　鎌倉市教育委員会

馬淵和雄 1998　「中世都市鎌倉の便所遺構について」『トイレ遺構の総合的研究―発掘された古代・中世トイレ遺構の研究―』奈良国立文化財研究所

馬淵和雄 2003　「北条小町邸跡　雪ノ下一丁目 401 番 5 ほか地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』19　鎌倉市教育委員会

馬淵和雄 2008　「大倉幕府周辺遺跡群（№49）の発掘調査―雪ノ下字天神前 562 番 30 地点―」『第 19 回　鎌倉市遺跡調査・研究発表会　発表要旨』鎌倉考古学研究所・鎌倉市教育委員会

馬淵和雄ほか 2002　『杉本寺周辺遺跡　二階堂字杉本 912 番 1 ほか地点発掘調査報告』鎌倉市教育委員会

馬淵和雄ほか 2004　「米町遺跡（№245）大町二丁目 2324 番 1 ほか地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』20　鎌倉市教育委員会

馬淵和雄ほか 2007　「若宮大路周辺遺跡群　小町二丁目 402 番 9 ほか地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』23　鎌倉市教育委員会

森孝子ほか 2001　『材木座町屋遺跡発掘調査報告書　鎌倉市材木座 1 丁目 910 番』材木座町屋遺跡発掘調査団

湯浅治久 1994　「東国の日蓮宗」『中世の風景を読む 2　都市鎌倉と坂東の海に暮らす』新人物往来社

図版1

1．調査地点鳥瞰（丸印が調査地点）

2．善寶寺 寺地図（丸印が調査地点付近に相当）

3．調査地点近景（東から下馬四ツ角を望む

4．県道鎌倉・葉山線と調査地点（西から）

1．上層遺構群全景（南から）

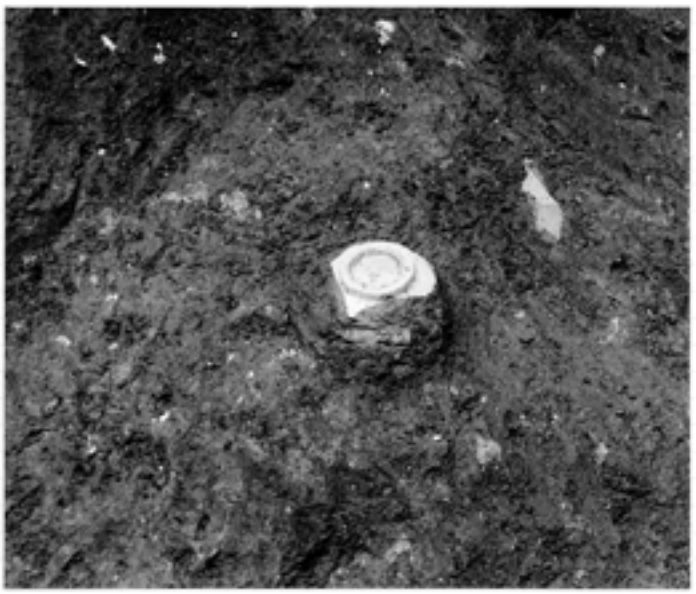
2．上層遺構群全景（西から）

図版3

1．溝１　北半部（南から）

2．溝１　北半部（北から）

3．溝１　南半部（南から）



4．青磁碗出土状況

1．溝２ 木枠部材（西から）

2．溝２ 木枠部材（南から）

1．溝２ 木枠部材（西から） 接続部拡大

4．溝２ 南側上層断面（南から）

図版5

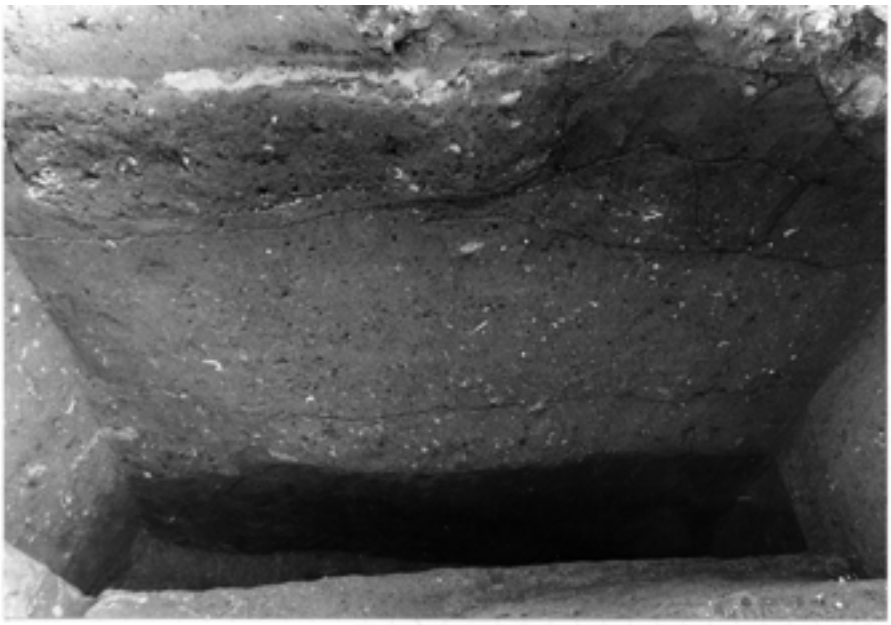
1．竪穴１（南から）

2．土坑１（南から）

3．土坑１土層断面（南から）

4．土坑１（西から）

5．土坑１・Ｐ13（西から）

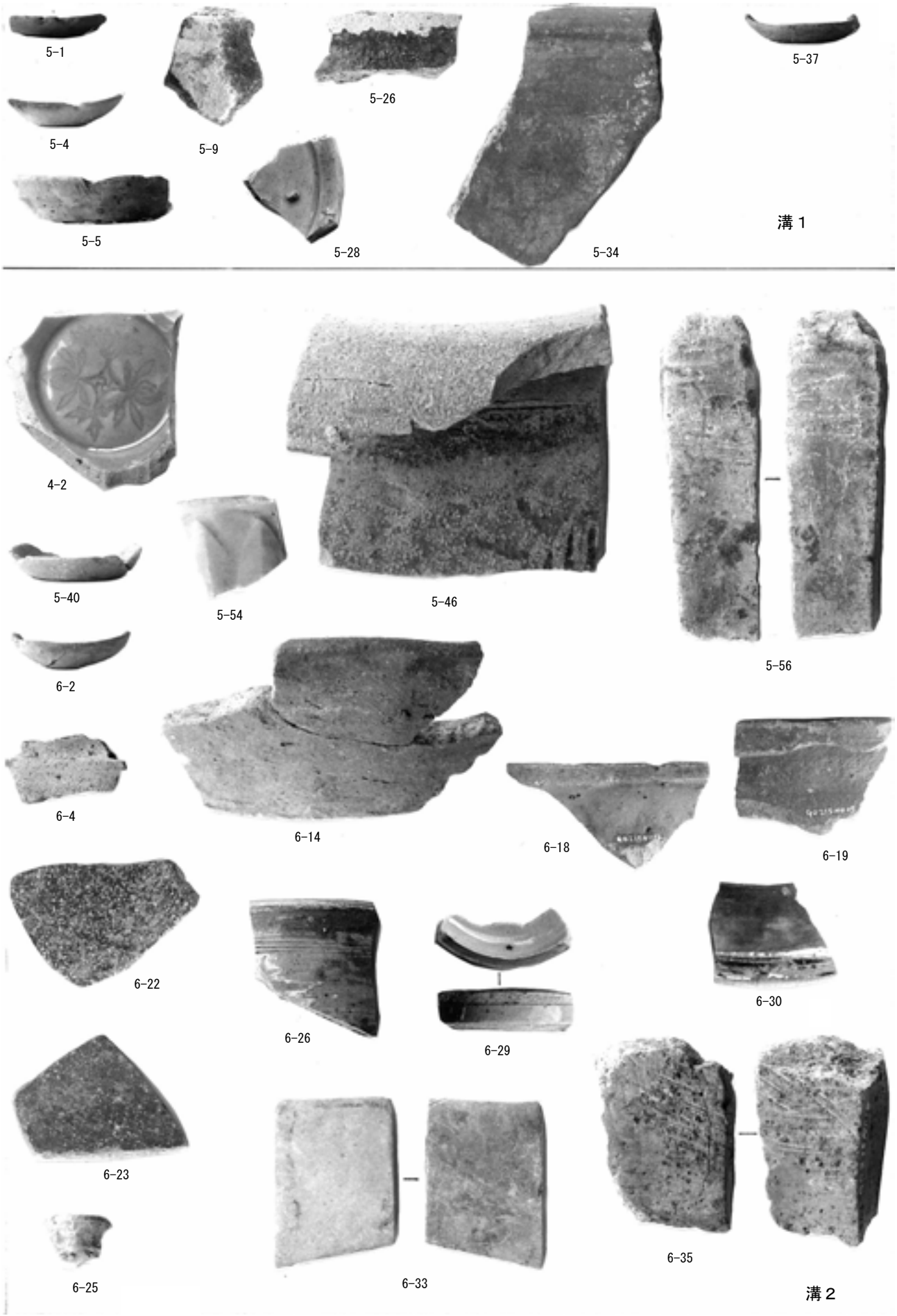


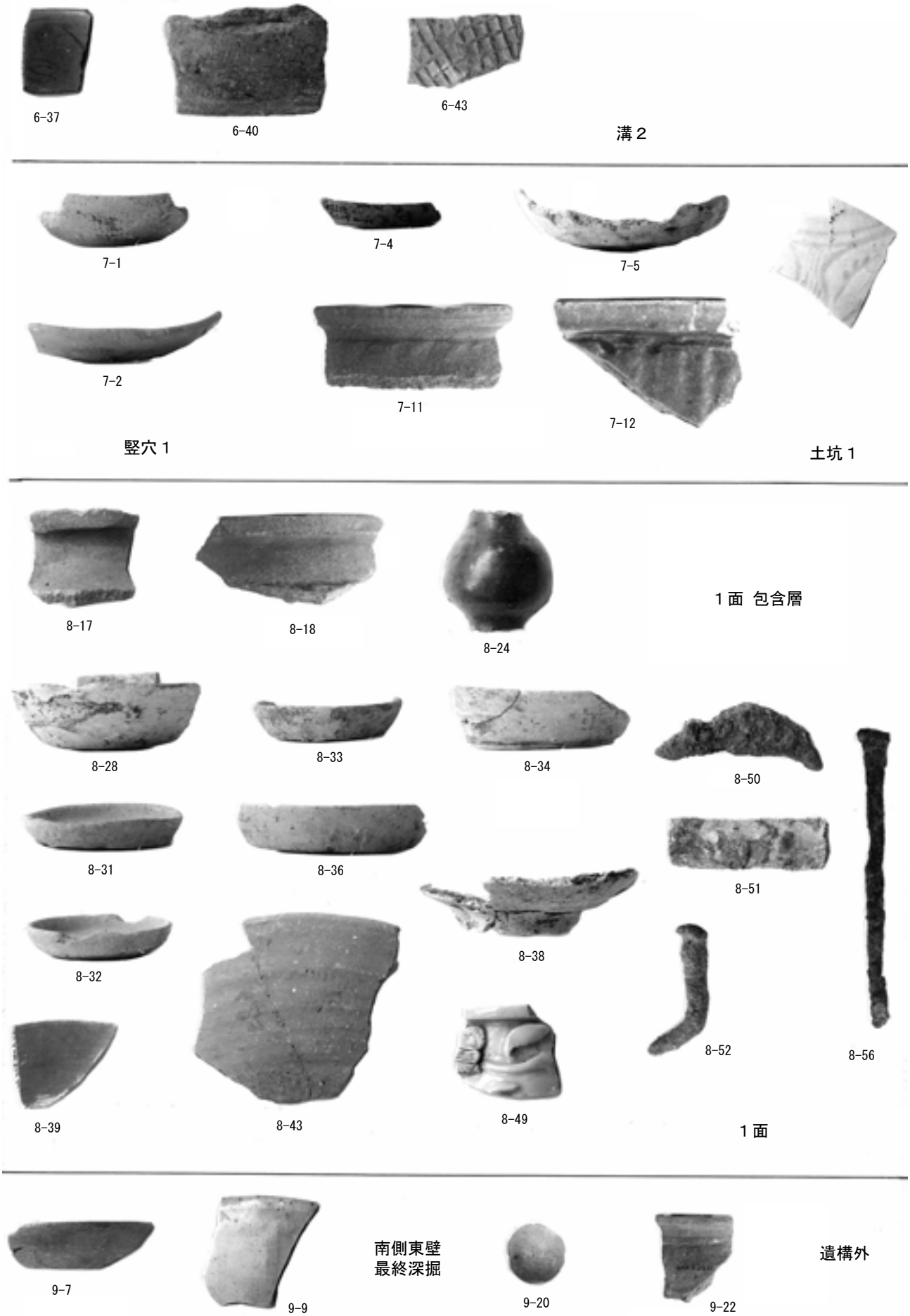
1. 東壁 北半部深掘り土層断面

2. 南壁 溝2部分土層断面

3. 南壁 道路部分土層断面

図版７


5-1
5-4
5-5
5-9
5-26
5-28
5-34
5-37
溝１
4-2
5-40
5-54
5-46
5-56
6-2
6-4
6-14
6-18
6-19
6-22
6-26
6-29
6-30
6-23
6-25
6-33
6-35
溝２


6-37
6-40
6-43
溝２
7-1
7-4
7-5
7-2
7-11
7-12
竪穴１
土坑１
8-17
8-18
8-24
１面 包含層
8-28
8-33
8-34
8-50
8-31
8-36
8-51
8-32
8-38
8-52
8-56
8-39
8-43
8-49
１面
9-7
9-9
南側東壁
最終深掘
9-20
9-22
遺構外

佐助ヶ谷遺跡（No.203）

―佐助一丁目496番4地点―

例言

1．本報は、佐助ヶ谷遺跡（№.203）内の鎌倉市佐助一丁目496番4における個人専用住宅の新築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告である。調査面積は44.00㎡。

2．発掘調査は、平成17年10月3日から10月27日にかけて鎌倉市教育委員会が実施した。

3．発掘調査体制は次の通りである。

調査担当者　熊谷満

調　査　員　伊藤博邦

作　業　員　渡辺輝彦、金丸義一、田島道夫

4．本報作成にあたっての資料整理参加者、および分担は次の通りである。

整理参加者　熊谷満、降矢順子、加藤千尋

遺物洗浄：加藤　遺物分類：降矢　図版作成・写真撮影・原稿執筆：熊谷

5．本報の凡例は次の通りである。

・図版縮尺　遺構図：1/60

・遺構図版　水糸高は海抜標高値を示す。

6．本報記載の「土丹」は在地産のシルト質凝灰岩を示す。

7．現地調査から本報作成に至るまで、以下の諸氏、諸機関に御教示・御協力を賜った。記して感謝の意を表したい。（順不同、敬称略）

齋木秀雄（有限会社鎌倉遺跡調査会）、社団法人鎌倉市シルバー人材センター

8．本調査に関わる出土遺物、図面、写真などの資料は鎌倉市教育委員会が保管している。

本文目次

第１章　遺跡の立地と環境 ---------- 232
第２章　調査の概要 ---------- 234
第３章　検出された遺構と遺物 ---------- 236
第４章　まとめ ---------- 238

挿図目次

図１　調査地点周辺図 ---------- 232
図２　調査区配置図 ---------- 234
図３　堆積土層 ---------- 235
図４　第1面 ---------- 236
図５　第2A・B面 ---------- 237

写真図版目次

図版１　１．Ⅰ区第1面全景（東から） ---------- 239
２．Ⅰ区第2面全景（東から）
３．Ⅰ区深掘りトレンチ完掘状況（東から）
４．Ⅰ区調査風景（東から）
５．Ⅰ区調査区北壁（第1面まで）
６．Ⅰ区調査区北壁（第2面まで）
７．Ⅰ区深掘りトレンチ北壁
８．Ⅱ区第1面全景（北から）
図版２　１．Ⅱ区第2面獣骨出土状況（東から） ---------- 240
２．Ⅱ区第2A面全景（北から）
３．Ⅱ区第2A面全景（南東から）
４．Ⅱ区第2B面獣骨出土状況（東から）
５．Ⅱ区第2B面全景（北から）
６．Ⅱ区第2B面2号河川（南から）
７．Ⅱ区調査区東壁
８．Ⅱ区調査区北壁

第１章　遺跡の立地と環境

本調査地点は鎌倉市佐助一丁目496番4に所在する、佐助ヶ谷遺跡（No. 203）の一地点である。佐助はもと佐介谷・佐介ヶ谷・三介谷とも呼ばれた。地名の由来に関しては伝えが多く、上総・千葉・常陸の三介の屋敷が谷内にあって三介ヶ谷になったともいい、佐介氏の祖、北条時盛（1197～1277）が当地に邸宅を構えていたことによるともいう。また、当地に鎮座する佐助稲荷神社の社伝では、当社の神霊が翁の姿に現れて、佐殿源頼朝に旗揚げを勧めて助けたためと伝える。『吾妻鏡』にも表れる古地名であるが、現行の「佐助」は昭和四十年（1965）二月一日および昭和四十三年一月一日の住居表示以降の地名である。国清寺、蓮華寺、松谷寺、松谷文庫や安達泰盛の「松谷別庄」などもこの地にあったとされる。

佐助ヶ谷は東南に開口する大きな谷で、左右には多くの小支谷を有する。谷戸のほぼ中央には、銭洗弁財天社の銭洗の井と佐助稲荷社の境内を水源とする佐助川が流れる。明治十二年（1879）の『郡村誌』は、「少許ニシテ相合シテ下流佐助川トナル、幅四尺、深平均五寸」といい、また、扇ガ谷村の項では「字佐介ガ山ノ谷間ニ発源シ、南流シテ大町村ニ入ル、長三町三十六間三尺、幅四尺ヨリ一間二尺ニ至ル、深四五寸ヨリ七八寸ヲ過ギズ、水勢緩ニシテ清シ、舟筏通ゼズ」と当時の川の様子を伝え、川筋に沿った古道をはじめ「山間各所ニ古路多シ」とも記している。

佐助ヶ谷遺跡で過去に実施された調査は、主に佐助川流域におけるものが多い。本調査地点の北西約100ｍに位置する地点３では、13世紀中葉から16世紀代に至る９期の遺構群が検出されており、多くの建物跡や井戸、溝のほか、門跡や池跡、基壇遺構といった、寺院あるいは屋敷地の一画を思わせる遺構群が検出されていることも注目される。また、本調査地点の南方約90ｍに位置する地点5では、

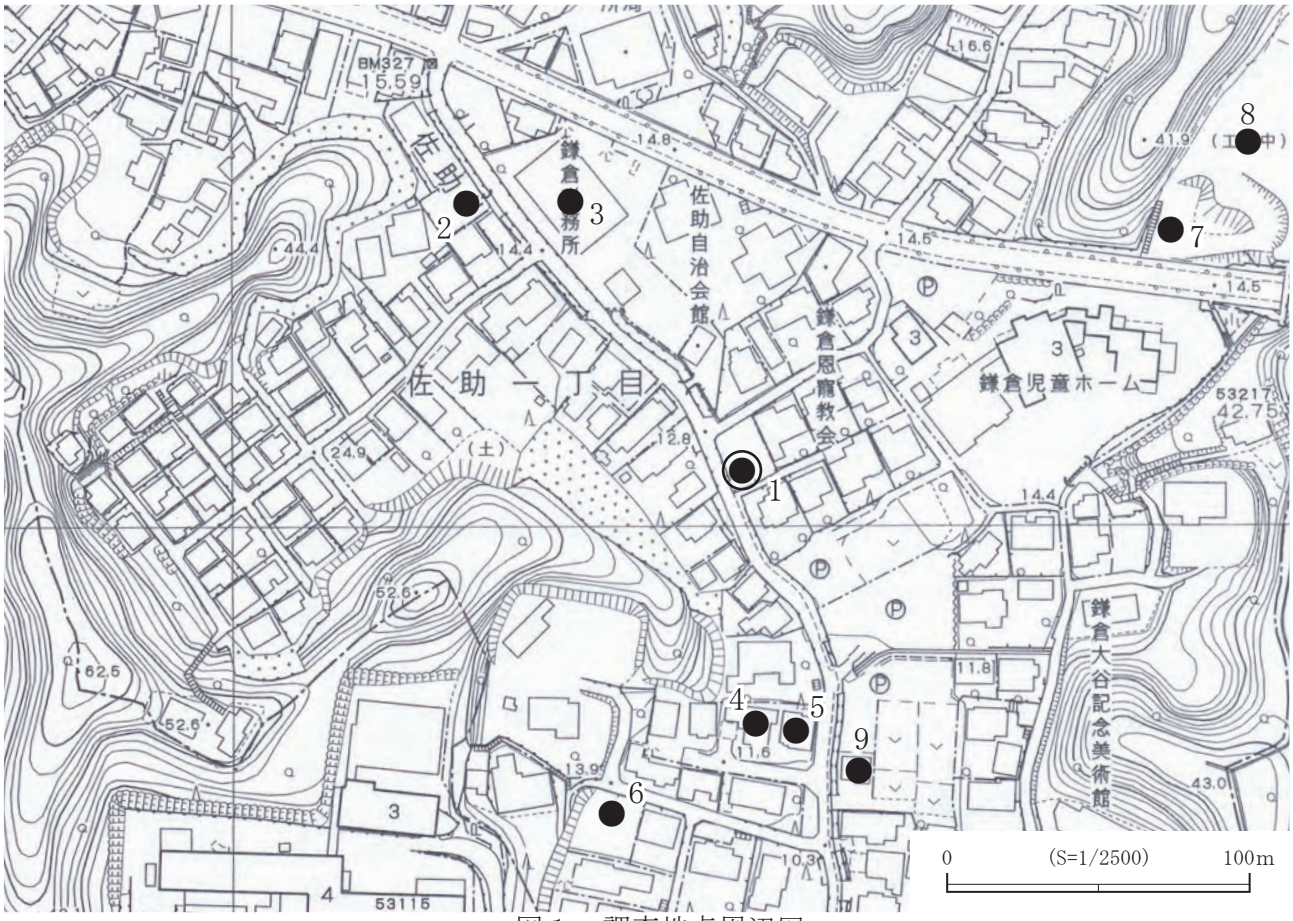


図１　調査地点周辺図

調査深度の制限があったものの、14世紀前半から15世紀前半に至る２枚の遺構面を検出している。地点５で特筆すべきは調査区東側において検出された落ち込みで、中世期の佐助川西岸であろうと推測されている。その他佐助ヶ谷遺跡内で行われた調査結果を概観して、概ね13世紀中葉頃からこの地における開発が活発になってくるということが言えるだろう。『吾妻鏡』寛元四年（1246）６月27日条に「入道大納言家渡御于入道越後守時盛佐介第。」とあり、これが佐助（佐介）の文献上の初見であるが、13世紀中葉には北条時盛の佐助邸があったことが知れ、当地がすでに開発されていたことが文献の上からも窺うことができる。

＜引用・参考文献＞

白井永二編『鎌倉事典』1992　東京堂出版
三浦勝男編『鎌倉の地名由来辞典』2005　東京堂出版
齋木秀雄『佐助ヶ谷遺跡（鎌倉税務署用地）発掘調査報告書』1993佐助ヶ谷遺跡発掘調査団
齋木秀雄・降矢順子『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書18（第１分冊）』2002鎌倉市教育委員会

＜調査地周辺地点一覧＞（図1）

1. 本調査地点
2. 佐助一丁目496番5地点『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書25（第２分冊）』2009鎌倉市教育委員会
3. 佐助一丁目566番1外『佐助ヶ谷遺跡（鎌倉税務署用地）発掘調査報告書』1993佐助ヶ谷遺跡発掘調査団
4. 佐助一丁目476番1地点『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書20（第１分冊）』2004鎌倉市教育委員会
5. 佐助一丁目476番1地点『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書18（第１分冊）』2002鎌倉市教育委員会
6. 佐助一丁目450番5外・450番29外『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書25（第１分冊）』2009鎌倉市教育委員会
7. 佐助一丁目620番地点『佐助ヶ谷遺跡』1989佐助ヶ谷遺跡発掘調査団
8. 佐助一丁目615番1他『佐助ヶ谷遺跡発掘調査報告書』2007有限会社鎌倉遺跡調査会
9. 平成18年確認調査地点

第２章　調査の概要

１．調査の経過と方法

本調査は佐助一丁目496番４地点における、個人専用住宅の建築に伴う埋蔵文化財発掘調査である。現地調査期間は平成17年10月３日から10月26日までの１ヶ月弱で、調査面積は44.00㎡。現地表の標高は約13.2mを測る。掘削に係る残土を場内に溜め置きする都合から調査区を東西に二分割し、便宜上東側をⅠ区、西側をⅡ区と呼称し、二度に分けて調査を行った。調査はまずⅠ区から始められ、重機により表土を除去した後は、すべて人力による作業となった。調査の結果2枚の遺構面が検出され、各面において遺構を掘削後、測量・写真撮影などの記録保存を行いⅠ区作業を終了した。その後にⅠ区を一旦埋め戻し、Ⅱ区の調査を開始した。10月26日にⅡ区の調査を終了し、器材等撤収してすべての調査を終了した。以下に主な工程を示す。

10月３日　Ⅰ区表土掘削、器材等搬入
10月７日　Ⅰ区1面調査終了
10月14日　Ⅰ区2面および深掘りトレンチ調査終了
10月17日　Ⅰ区埋め戻し、Ⅱ区表土掘削
10月19日　Ⅱ区1面調査終了

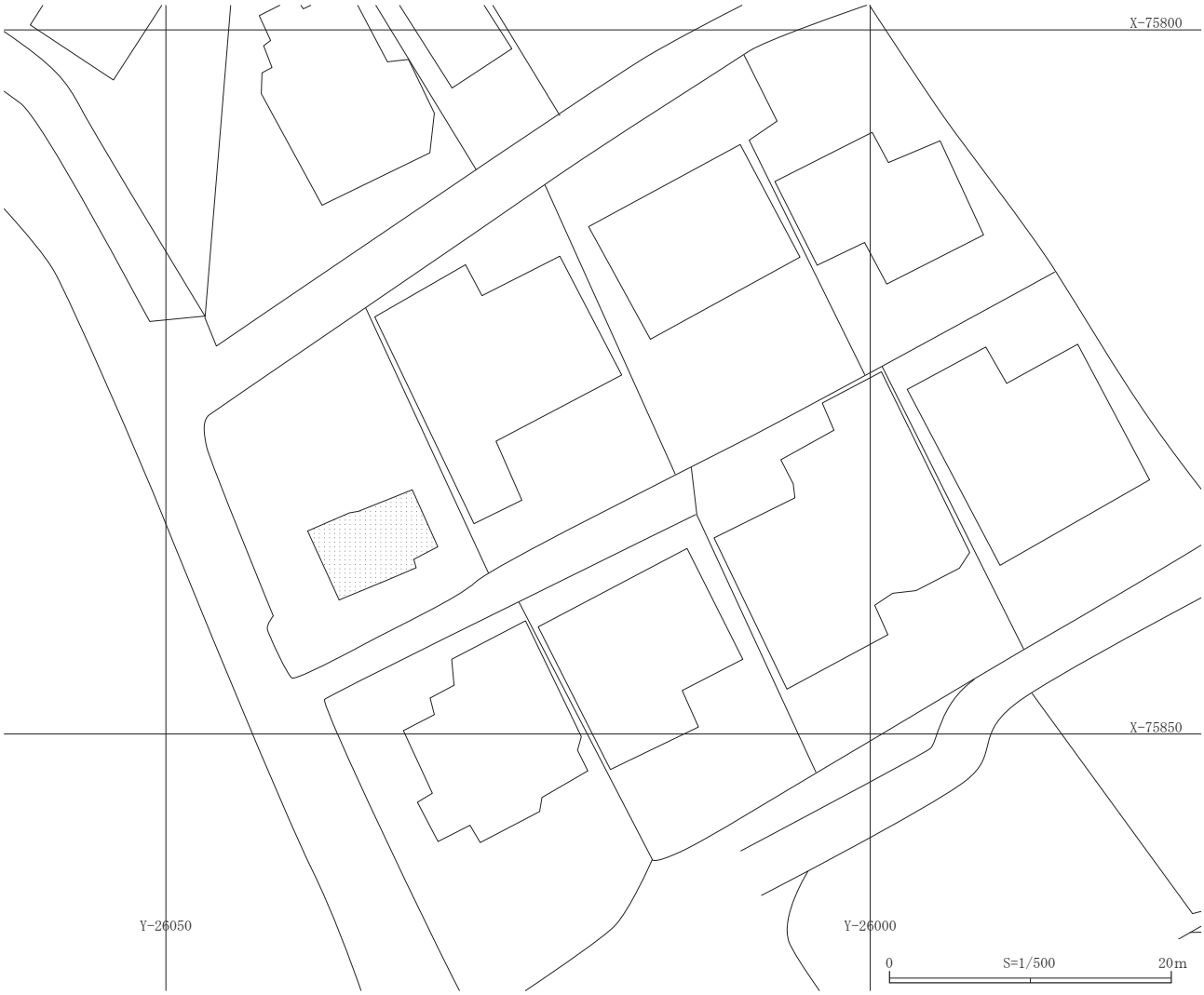
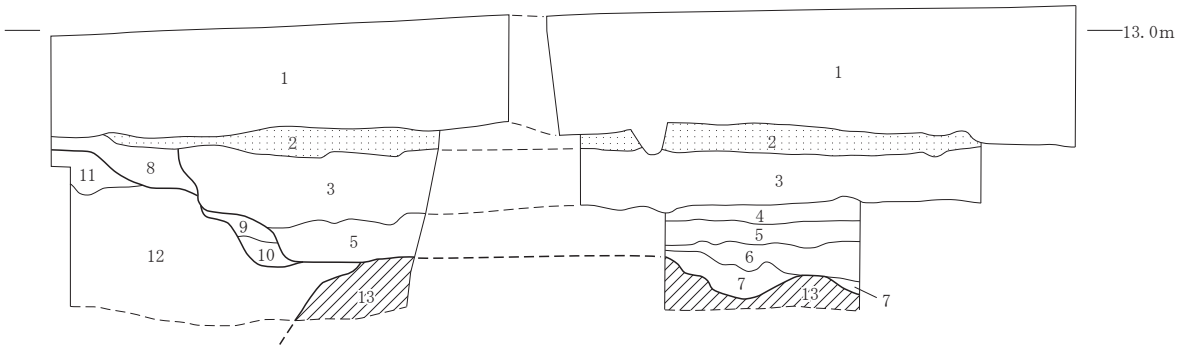


図２　調査区配置図



1. 表土　拳大～人頭大の土丹塊を密に含む。底面にコンクリートプレートが部分的に敷かれる。
2. 土丹地業層　暗灰色土に拳大の土丹小塊を多く含む。締まりあり。
3. 暗褐色粘質土　拳大ほどの土丹小塊をやや多く含む。締まりなし。
4. 青黒色粘質土　土丹粒をやや多く含む。人頭大の土丹塊を少量含む。締まり弱く、粘性強い。
5. 黒褐色粘質土　土丹粒を微量含む。締まりあり。
6. 青黒色粘質土　土丹粒・小砂利を少量含む。締まりあり。
7. 青黒色砂質土　小砂利を主体とする。拳大の土丹・安山岩を含む。
8. 暗褐色土　土丹粒を微量含む。砂少量混入。
9. 暗灰色粘質土　褐鉄を少量含む。土丹粒をわずかに含む。粘性やや強く、締まりやや弱い。
10. 青黒色砂質土　6層に近似。
11. 暗褐色粘質土　土丹粒・拳大の小土丹塊をやや多く含む。粗粒砂を少量含む。
12. 暗褐色粘質土　拳大～60㎝四方ほどの大型土丹を多量含む。締まり弱い。
13. 青灰色粘質土　青灰色土丹と青灰色粘質土の混交土。締まり強い。中世基盤層。

0　(S=1/60)　2m

図３　堆積土層

10月26日　Ⅱ区2面および深掘りトレンチ調査終了、器材等撤収

測量に際しては、日本測地系（座標系AREA９）の国土座標軸を用いてグリッドを設定した。このため本報で用いている方位標の北は真北を示す。また海抜標高値は、鎌倉市三級水準点BM327（標高15.589m）を基に移設した。

２．堆積土層

本調査では、2枚の遺構面について調査を行い、さらに部分的なトレンチによって基盤層を確認した。厚さ約100㎝の表土層を除去すると、標高約12.3mで土丹地業層が検出され、これを第1面とした。比較的良好な地業であったが、現代の削平により上面が削り取られ、面はやや荒れた状態であった。10～20㎝の厚みをもつ第１面土丹地業層を除去すると以下の堆積層はすべて河川の覆土であり、これを第2面として調査を行い、以下は部分的なトレンチによって河床を確認した。河床面は青灰色シルト質凝灰岩を主体とし、黒褐色粘質土の混入する締まりの強い堆積層となっていた。この堆積層中から遺物は出土せず、中世基盤層と捉えた。

第３章　検出された遺構と遺物

本調査では２枚の遺構面が検出された。第２面では２時期の遺構が検出されたため、新しい時期のものを第２Ａ面、先行する時期のものを第２Ｂ面として説明を加える。また出土遺物に関しては、掘り込みを伴わない状況で出土した獣骨のほかは水磨したかわらけ細片が少量出土したのみであったため、図示し得なかった。

第1面

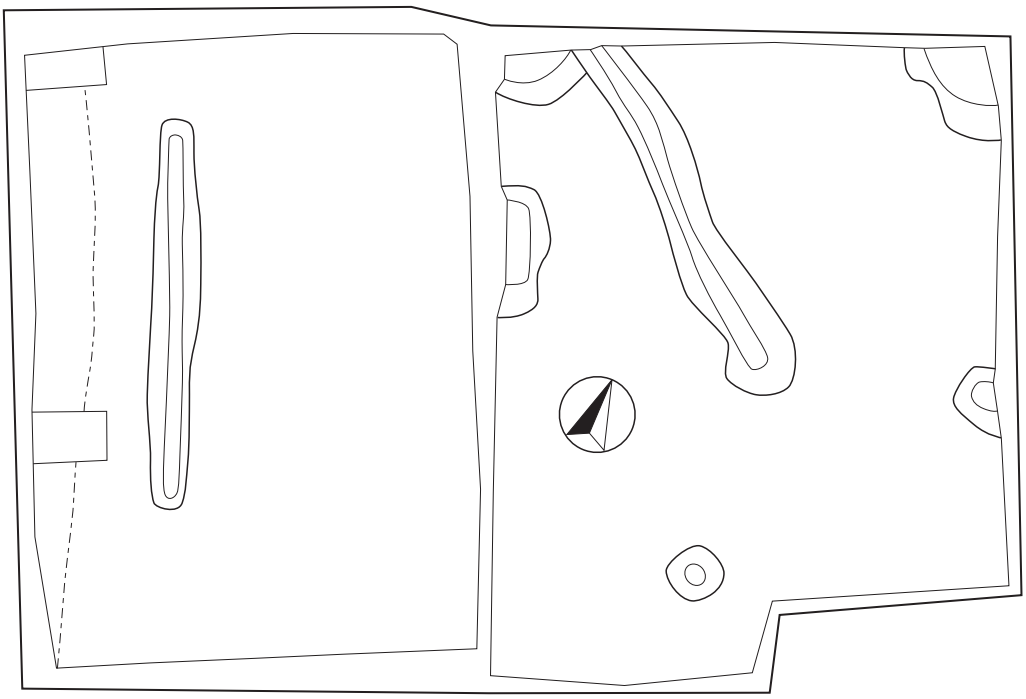
表土下約100㎝の深さで土丹地業面が検出され、これを第１面とした。標高約12.3ｍを測る。面直上まで表土層であり、上面はやや荒れた状況であったことから、本面は現代の削平を受けているものと思われる。検出された土坑等はすべて現代撹乱であり、中世遺構は検出されなかった。Ⅱ区西端部は土丹地業層ではなく、砂の少量混入する暗褐色土層となっていたが、トレンチによって堆積土を観察したところ、地業層の下層が露出しているものであることが判った。

第2A面

第１面地業層の直下層上面である。標高約12.1ｍを測る。調査区のほぼ全面が河川遺構覆土となっており、調査の結果河川には２時期の重複が確認された。湧水のためすべての範囲を底面まで掘削することができず、調査区北壁付近にトレンチを設定し底面を確認した。また、このトレンチ土層断面で、Ⅱ区中央付近より西へかけて基盤層を切り込む落ち込みも確認された。

１号河川

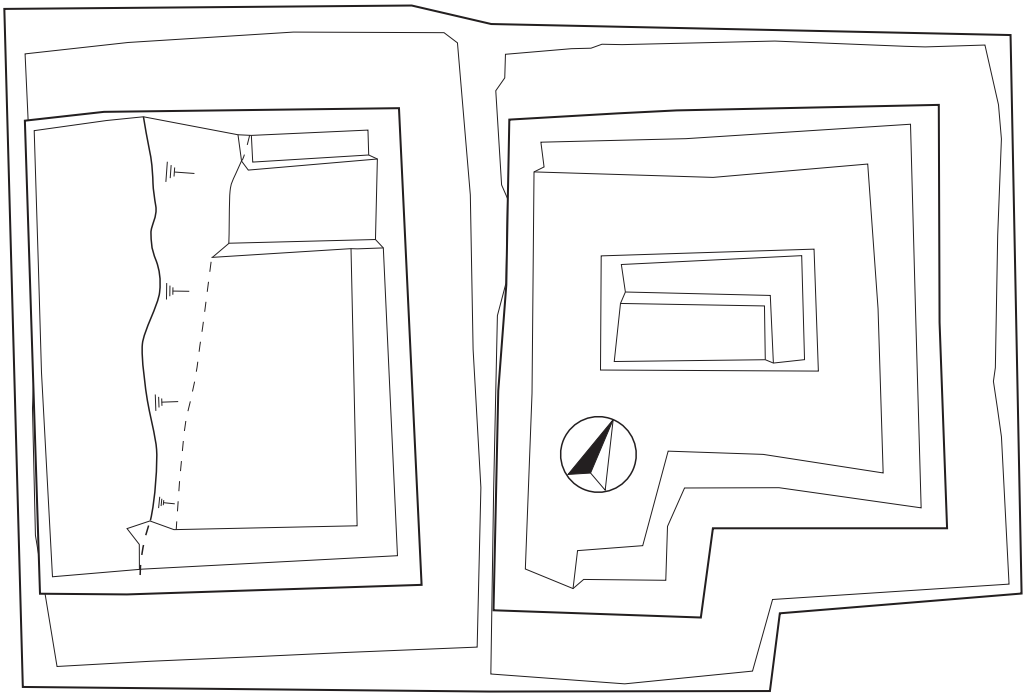
Ⅱ区中央付近で西岸が検出された。以東はすべて本址の覆土となり、東岸は調査区外になるものと思



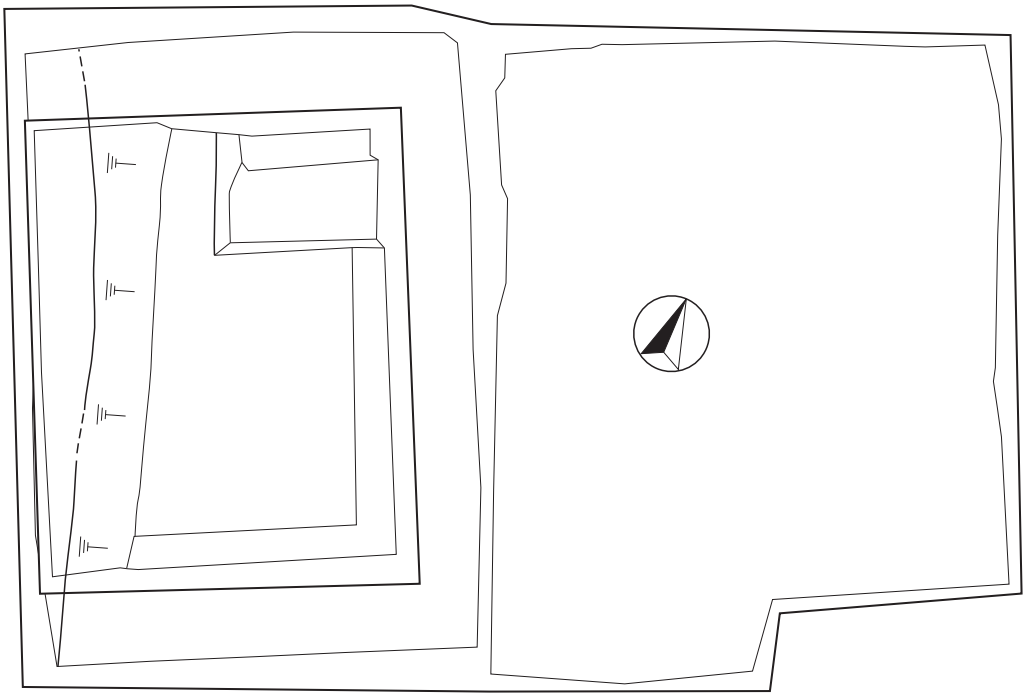
▲第１面

0　(S=1/60)　2m

図４　第１面



▲第 2A 面



▲第 2B 面

0 (S=1/60) 2m

われる。底面直上層が砂礫層となっており河川堆積の様相を呈していたことから、河川跡であろうと判断した。トレンチ北壁では深さ1.2m、底面標高約11.2mで河床が検出される。河床面は全体的に東・南へ向かって降っていく状況が確認されていることから、河川の中心は調査区より東にあり、流下方位は南に向かうものであることが推測される。規模は検出範囲内で幅6.3m以上を測る。

第２Ａ面

前述の通り、第２Ａ面と同一面で１号河川に先行する時期の河川跡が検出され、これを第２Ｂ面とした。また、深掘りトレンチ土層断面で検出された落ち込み遺構についてもここで説明を加えることとする。

２号河川

１号河川と重複し、これに先行する時期のものとなる。１号河川西岸のすぐ外側に立ち上がりが検出されたほかは、１号河川に切り込まれて失っている。壁面の立ち上がりは1号河川より緩く立ち上がり、上端は調査区外西まで延びる。確認面からの深さは約1.0mを測る。

落ち込み遺構

Ⅱ区トレンチ断面で確認された。Ⅱ区中央付近より西へかけて、基盤層を切り込んで落ち込む。立ち上がり上端は１号河川によって失われている。土層断面から見る規模は幅210㎝以上、深さ140㎝以上を測る。規模の大きさや、壁面の立ち上がり状況から、本址も河川跡となる可能性がある。

第4章　まとめ

本章では、周辺調査地点との関連から検出された河川跡について説明を加えておきたい。地点名については図１の地点名表記を使用することとする。

本調査地点で検出された河川跡の延長と思われる遺構は、地点５や、確認調査のみであるが地点９でも検出されており、佐助川の旧河道であろうと推測されている。地点５では河川西岸が検出され、地点９では河川東岸が検出されており、両地点はほぼ向かい合わせに近い位置関係にあることから、これを基に推定される河川幅は約24mを測る。ただし、本調査地点で検出された１・２号河川や落ち込み遺構といった河川跡と思われる遺構から、２時期ないし３時期にわたる流路の変遷が推測され、先に掲げた河川幅はこうした時期差を無視した西岸・東岸間の最大幅であるので、一時期にはこれより幅の狭いものであった可能性も考えられる。本調査地点と地点５で検出された河川西岸を直線的に結ぶとその方位はＮ－11°－Ｗを指すが、これも同時期のものとは限らないので参考程度に留められたい。また、地点９の100mほど南で現在の佐助川は東へと向きを変えており、中世においてもこのように向きを変えていたことは御成町625番２地点の調査（註１）で確認されている。地点５・９はこの屈曲部に近いこともあり、他の部分より幅が広がっている可能性もある。明治十二年（1879）の『郡村誌』では川の規模を幅四尺～一間二尺（約120～240㎝）、深さ四五寸～七八寸（約12～24㎝）とし、「水勢緩ニシテ清シ、舟筏通ゼズ」と小川であった様子を伝えているが、本調査では１号河川で幅6.3m以上を測る規模が確認されており、中世にはもう少し規模の大きなものであった様子である。河川跡という性格上、出土遺物も水磨した細片がほとんどであり、詳しい年代を比定することができなかったのは残念であるが、今後周辺の調査に期待したい。

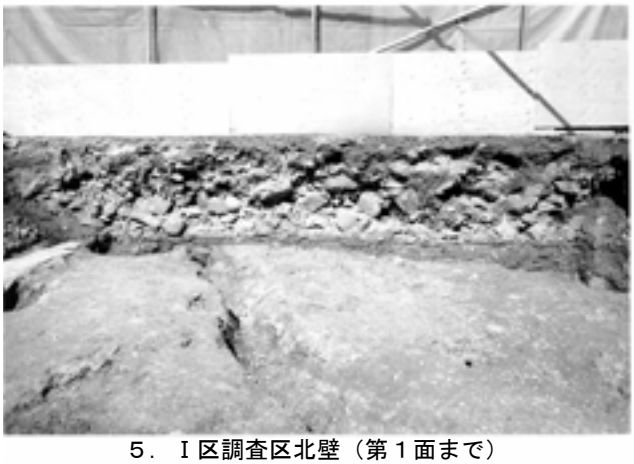
註1　御成町625番2地点『今小路西遺跡（社会福祉センター用地）』1993今小路西遺跡発掘調査団

１．Ⅰ区第１面全景（東から）

２．Ⅰ区第２面全景（東から）

３．Ⅰ区深掘りトレンチ完掘状況（東から）

４．Ⅰ区調査風景（東から）



５．Ⅰ区調査区北壁（第１面まで）

６．Ⅰ区調査区北壁（第２面まで）

７．Ⅰ区深掘りトレンチ北壁

８．Ⅱ区第１面全景（北から）

図版２

１．Ⅱ区第２面獣骨出土状況全景（東から）

２．Ⅱ区第２Ａ面全景（北から）

３．Ⅱ区第２Ａ面全景（南東から）

４．Ⅱ区第２Ｂ面獣骨出土状況（東から）

５．Ⅱ区第２Ｂ面全景（北から）

６．Ⅱ区第２Ｂ面２号河川（南から）

７．Ⅱ調査区東壁

８．Ⅱ区調査区北壁

報 告 書 抄 録

ふりがな	かまくらしまいぞうぶんかざいきんきゅうちょうさほうこくしょ
書名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書
副書名	平成２２年度調査報告
巻次	２７　（第１分冊）
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者	原　廣志／原　廣志／馬淵和雄・松原康子／馬淵和雄・松原康子・根本志保／熊谷　満
編集機関	鎌倉市教育委員会
所在地	〒２４８－８６８６　鎌倉市御成町１８番１０号
発行年月日	西暦２０１１年3月３１日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
せきぜんいせき 積善遺跡	神奈川県鎌倉市 十二所字二ツ橋 ４番３	14204	440	３５° 31′ 88″	１３９° 57′ 604″	20040423 ～ 20040520	34.00	個人専用 住　宅 （杭基礎構造）
とうしょうじあと 東勝寺跡	神奈川県鎌倉市 小町三丁目 ５３８番８	14204	246	３５° 32′ 133″	１３９° 55′ 91″	20040730 ～ 20040903	42.84	個人専用 住　宅 （杭基礎構造）
とうしょうじあと 東勝寺跡	神奈川県鎌倉市 小町三丁目 ５３８番３	14204	246	３５° 32′ 141″	１３９° 55′ 929″	20040826 ～ 20041025	64.50	個人専用 住　宅 （地盤の柱状改良）
じょうみょうじきゅうけいだいいせき 浄妙寺旧境内遺跡	神奈川県鎌倉市 浄明寺三丁目 １２２番１外	14204	408	３５° 32′ 176″	１３９° 57′ 141″	20040818 ～ 20041022	49.49	個人専用 住　宅 （杭基礎構造）
げばしゅうへんいせき 下馬周辺遺跡	神奈川県鎌倉市 大町二丁目 １００１番４	14204	200	３５° 31′ 521″	１３９° 55′ 141″	20050203 ～ 200505228	46.50	個人専用 住　宅 （杭基礎構造）
さすけがやついせき 佐助ヶ谷遺跡	神奈川県鎌倉市 佐助一丁目 ４９６番４	14204	203	３５° 31′ 928″	１３９° 54′ 377″	20051004 ～ 20051027	44.00	個人専用 住　宅 （地盤の柱状改良）

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
せきぜんいせき 積善遺跡	都　市	中　世	礎石建物、溝、土壙、柱穴	かわらけ、貿易陶磁器、国産陶器、瓦質製品、石製品、金属製品、木製品等	
とうしょうじあと 東勝寺跡	社　寺	中　世	礎石建物、掘立柱建物跡、土壙、柱穴	かわらけ、貿易陶磁器、国産陶器、瓦質製品、石製品、金属製品	
とうしょうじあと 東勝寺跡	社　寺	中　世	礎石建物、土壙、柱穴	かわらけ、貿易陶磁器、国産陶器、木製品　等	
じょうみょうじきゅうけいだいいせき 浄妙寺旧境内遺跡	社　寺	中　世	礎石建物、掘立柱建物跡	かわらけ、貿易陶磁器、国産陶器、木製品　等	
げばしゅうへんいせき 下馬周辺遺跡	都　市	中　世	道路状遺構、竪穴建物	かわらけ、貿易陶磁器、国産陶器、木製品　等	
さすけがやついせき 佐助ヶ谷遺跡	都　市	中　世	掘立柱建物跡、土坑、ピット、かわらけ溜り、土丹列、道路状遺構　等	舶載青磁、染付、瀬戸・美濃、常滑、かわらけ等	

鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書　２７
平成２２年度発掘調査報告
（ 第 １ 分 冊 ）

発 行 日　平成２３年３月３１日

編集・発行　　鎌倉市教育委員会
印　　刷　　文一堂印刷株式会社